

三重県桑名市
高塚山古墳基礎調査報告書

平成18年3月

桑名市教育委員会

序

高塚山古墳は、江戸時代に著された『久波奈名所団会』の中で「無双の景地」との記述が見られるように、木曽三川と伊勢湾を一望できる風光明媚な場所として、広く市民に親しまれてきました。また、桑名の地を拓いた桑名首の墓という説もあり、その規模や形態からも、桑名のシンボルといっても過言ではないと思われる遺跡です。

桑名市第4次総合計画ではまちづくりの基本プロジェクトのひとつとして、「歴史文化回廊都市」づくりが考えられています。これは歴史・自然遺産を活かし、桑名市の顔となるような拠点づくりを進めると同時に、市内に広がるこうした資源をネットワーク化した回廊を形成し、多くの人々がふれあい、活動できる空間をつくることがあります。

高塚山古墳は、三重県北勢地区最大級の規模を持つ前方後円墳と言われております、本基礎調査においても保存すべき遺跡として価値付けが為されました。また、その周辺は中心市街地近郊に残された貴重な緑地であることからも、歴史的、文化的拠点としてふさわしい遺跡であると考えます。

平成16年には桑名市・多度町・長島町が合併し、新桑名市が誕生しました。新しい桑名市は「水と緑と歴史が育む豊かな快適交流文化都市」をめざしています。高塚山古墳がその個性を活かした新たな交流を育み、多くの人々がふれあうことのできる空間を生み出すことを希望いたします。

最後になりましたが、調査にご協力いただきました関係者の方々に厚く感謝いたします。

平成18年3月

桑名市教育委員会教育長 小津 嘉彦

例　言

1. 本書は、三重県桑名市大字北別所字高塚山に所在する高塚山古墳の基礎調査報告書である。
2. 調査は平成14～17年度にかけて市単費で実施し、取りまとめを株式会社文化財保存計画協会に委託した。
3. 本書の執筆は第3章3-(2)a、第4章1を豊田祥三、第3章3-(2)b、第4章2、3を竹内英昭、その他を桑名市教育委員会及び株式会社文化財保存計画協会が行った。編集は桑名市教育委員会、株式会社文化財保存計画協会で行った。
4. 調査にあたっては下記の機関、方々にご指導、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表す。

三重県教育委員会文化財保護チーム、桑名市文化財保護審議会、山家建設株式会社、柴田涼子、水谷憲二、水谷吏江、岩間昭道、奥田崇晃、岡本広子、威能拓実、大原夕佳、長崎千明、大谷茂之
5. 本調査は地権者の方々の、文化財に対する深いご理解のもと実施することができた。調査に対する格別のご協力、ご援助に対して厚く御礼申し上げる。
6. 本調査に関する諸資料は、桑名市教育委員会で保管している。

目 次

第1章 調査の趣旨と経過	1
1. 調査の趣旨	1
2. 調査体制	1
3. 調査経過	2
第2章 高塚山古墳の概要	4
1. 高塚山古墳の位置	4
2. 高塚山古墳の歴史	5
3. 高塚山古墳の現状	6
4. 高塚山古墳の周辺環境	9
第3章 高塚山古墳基礎調査	11
1. 高塚山古墳基礎調査の概要	11
2. 測量	12
3. 試掘調査	13
(1) 遺構	13
(2) 遺物	26
4. 自然科学分析	46
5. 地中レーダー探査	51
第4章 考察	57
1. 高塚山古墳出土埴輪の位置付け	57
2. 高塚山古墳の墳形・規模・時期	60
3. 高塚山古墳をめぐる伊勢湾周辺の動向	61
第5章 高塚山古墳の保存と整備	65
1. 古墳の保存	65
2. 古墳の整備	65

第1章 調査の趣旨と経過

1. 調査の趣旨

高塚山古墳は、三重県北勢地区最大級の規模を持つ前方後円墳と言われ、非常に文化財的価値の高い遺跡であると考えられてきた。

また、桑名市第4次総合計画でも高塚山古墳周辺は、中心市街地近郊に残された貴重な緑地として保存活用をめざすとともに、高塚山古墳を拠点とした歴史的環境の整備が望まれている地域でもあった。

しかし、発掘等の調査は行われていなかったため、高塚山古墳の学術的位置付けが為されていないのが現状であった。

そこで、本基礎調査を実施し、現状の正確な、また考古学的な記録を作成し、古墳の学術的位置付けを明確にすることで、市民にとっての高塚山古墳の価値を確認することを調査の趣旨とした。

2. 調査体制

平成14年度に実施した現況の地形測量図を踏まえて、平成15年度には高塚山古墳基礎調査委員会を設置した。委員会は史跡、埋蔵文化財に関する学識経験者、桑名市文化財保護審議会委員等から構成されており、調査協力として三重県教育委員会文化財保護チームの指導及び助言を得た。事務局は桑名市教育委員会文化課が担当した。

設置要項及び委員は以下のとおりである。

高塚山古墳基礎調査委員会設置要綱

- (趣旨)
 第1条 この要綱は、高塚山古墳の基礎調査をするため「高塚山古墳基礎調査委員会」(以下「委員会」)を設置し、学術調査の円滑な推進を図りつつ、調査で得られた成果を基に基本的な必要事項を定める。
- (目的)
 第2条 高塚山古墳は、北勢地方では前方後円墳として著名な遺跡であることから、学術調査を行い本質的な価値を明確にして保存伝承に役立てることを目的とする。
- (組織)
 第3条 委員会の委員は7名以内で組織する。ただし、必要ある場合は、この限りではない。
 (委嘱)
 第4条 委員は、学識経験者及び関係行政機関の職員のうちから教育委員会が委嘱する。
- (任期)
 第5条 委員の任期は、平成15年2月13日～平成18年3月31日までとする。ただし、その欠員が生じた場合は前任者の残任期間とする。
- (会長)
 第6条 委員会に、会長1名を置く。
 2 会長は委員の協議により定める。
- 3 会長は、会務を總理し会議の議長となる。
 (会議)
 第7条 委員会の会議は、会長が必要に応じて招集する。
 2 委員会は、調査を正常かつ円滑に行うため非公開とする。

(庶務)

第8条 委員会の庶務は、教育委員会事務局文化課において処理する。

(委任)

第9条 この要綱に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、会長が会議に諮つて定める。

附 則

この要綱は、平成15年2月13日から施行する。

この要綱は、平成18年3月31日にその効力を失う。

表1 高塚山古墳基礎調査委員会委員

区分	名前	所属
委 員	○八賀 晋	三重県文化財保護審議会委員
	西羽 晃	桑名市文化財保護審議会委員
	山澤 義貴	桑名市文化財保護審議会委員
	竹内 英昭	斎宮歴史博物館調査研究グループ主査
	小津 嘉彦	桑名市教育委員会教育長
	桜尾 健三	桑名市教育委員会教育部長
調査協力	駒田 利治	三重県教育委員会文化財保護チームマネージャー（平成15年度）
	山田 猛	三重県教育委員会文化財保護室長（平成16・17年度）

※ 所属は当時
○印は会長

3. 調査経過

本基礎調査は平成14～17年度にかけて実施した。各年度毎の概要は以下のとおりである。

平成14年度

株式会社バスコに委託して現況の地形測量を行った。平成15年3月24日には竹内英昭氏（三重県教育委員会文化財保護チーム・当時）に、今後の調査の方針等について現地でご指導いただいた。

平成15年度

上位計画となる桑名市第4次総合計画や、調査・保存に向けての現状と課題等を精査し、高塚山古墳基礎調査委員会を設置した。

・第1回委員会（平成16年3月24日） 於：桑名市役所議会棟3階議員控え室、現地

八賀晋氏を会長に選出し、協議を行った。協議では地中レーダー探査を行った後、その結果を踏まえて試掘調査を実施することを決定した。また、学術的な価値付けを行うことが最重要であり、保存等、将来を見据えたうえでのデータ収集に主眼を置くことが確認された。

平成16年度

株式会社バスコに委託して地中レーダー探査を行った。地中レーダー探査の詳細については

第3章5を参照されたい。この地中レーダー探査の結果を踏まえての試掘調査は、桑名市教育委員会が9月25日～12月20日にかけて実施した。試掘調査の詳細については第3章3を参照されたい。

なお、試掘トレンチの位置については竹内委員にご指導いただいた。また、山澤、竹内委員には調査方法について現地での具体的なご指導をいただいた。

・第2回委員会（平成16年11月24日）　於：現地、桑名市教育委員会事務局文化課

試掘調査の現地視察を中心実施した。A、B、Dの3箇所のトレーニングで墳丘が確認され、古墳の規模について具体的なご指導をいただいた。また、出土遺物も器種、時期等についてご指導いただいた。

平成17年度

試掘調査で出土した遺物及び遺構図面の整理、報告書の作成を行った。詳細については第3章3を参照されたい。

なお、出土した埴輪については豊田洋三氏（三重県埋蔵文化財センター技術補助員）にご協力いただき、あわせて報告書もご執筆いただいた。

・第3回委員会（平成18年2月9日）　於：桑名市教育委員会事務局文化課

古墳の範囲、保存・管理、報告書の作成等について協議を行った。



写1 委員会風景（現地）



写2 委員会風景（協議）

第2章 高塚山古墳の概要

1. 高塚山古墳の位置

桑名市は三重県最北端に位置し、揖斐・長良・木曽の三大河川と伊勢湾に接し、鈴鹿連峰・養老山系を望む。地形的には、養老・鈴鹿山麓の裾野としてなだらかな平野部で、市街地は土砂の堆積によって形成されたデルタ（三角州）地に形成されている。

高塚山古墳は桑名市の西方、北別所集落西側の尾野山西方にある高塚山に所在し、所在地は大字北別所字高塚である。この周辺には高塚山下遺跡や西方古窯跡などの遺跡が分布する。

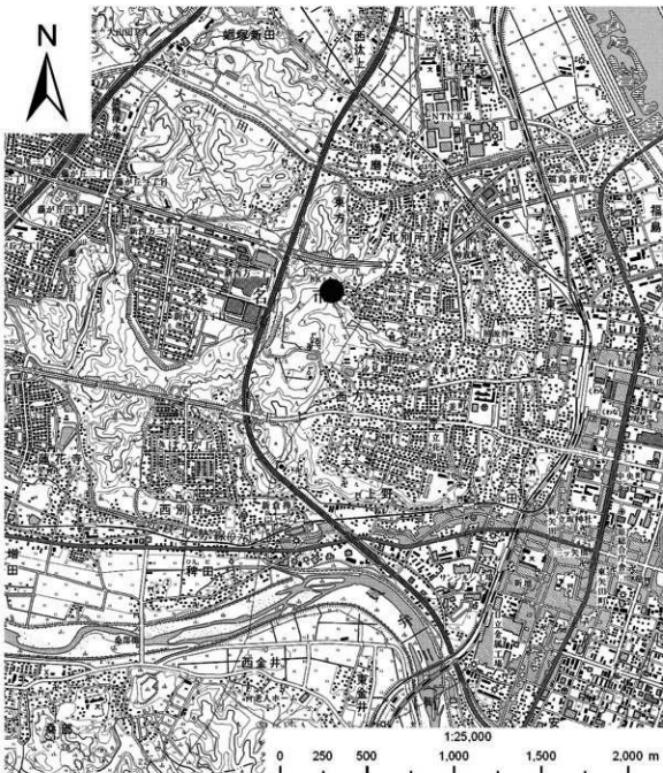


図1 高塚山古墳位置図（上記●）

2. 高塚山古墳の歴史

桑名は、伊勢湾及び大河に接するという地理的条件から、古来より水上交通を利用する広域的な交易の拠点として発達し、江戸時代に入ると、「七里の渡し」として知られる東海道五十三次の42番目の宿場町として、また桑名11万石の城下町として、大いに栄えた。

市内には、古墳の他にも城館跡や窯跡、寺院跡などの埋蔵文化財や建造物・天然記念物などの文化財が数多く所在するが、4世紀から5世紀の築造と推定される高塚山古墳はこれらの中でも古い時期の遺跡と考えられている。

高塚山は、近世段階で既にその存在は認識されており、『桑名旧記』には「一丸山 里人高塚といふ 播磨村新田」との記述が見られる。古墳として認識されていたかどうかは不明であるが、名勝としてよく知られていたようで、『久波奈名所図会』には「無双の景地」と記されている。また、『桑名藩御領分郷村案内帳附案内帳』には「一御林 壱ヶ所 四丁目 但高塚山ト云景色之所也」との記載がみられる。近代以降の資料には『伊勢名勝志』があり、「丸山一名高塚山」として名勝の部に記載されている。



丸山
桑名古事記云、尾州名古屋城・長崎城
三遠の山々濃州恵那山・信州御嶽・加賀白山・越州立山・飛州
高山・江州伊吹山等、瞬に見へて、無双の景地なり。山の地面
近辺に秀て円渦なり。依て山の名となれり。此地より南へ統て
越州を主と馬場あり。桜の馬場といふ。的場、角場、用水井戸
今尚遺れり。桑名三社より北、坂路を過、坂の下といふ
人家多し。西方村の出張なり。夫より小き流を越て播磨新田、

図2 丸山 出典:『久波奈名所図会』(中巻)

3. 高塚山古墳の現状

高塚山古墳は台地の端部に築造された前方後円墳であるが、宅地化の波が押し寄せてきており、周辺地形は古墳の築造された時代から大きな改変を受けている。

古墳の前方部と考えられる北側には都市計画道路桑名員弁線が建設され、一部削平を受けており、急勾配の斜面が広がっている。

発掘前の現況では、周濠、主体部、副葬品等は確認されておらず、表層水による穿掘の著しい墳丘がかろうじて確認できるのみであった。竹林造成時に削平された部分も少なくなく、築造当時の姿をとどめていないが、北勢地方に現存する数少ない前方後円墳として貴重な遺跡であることは間違いないであろう。

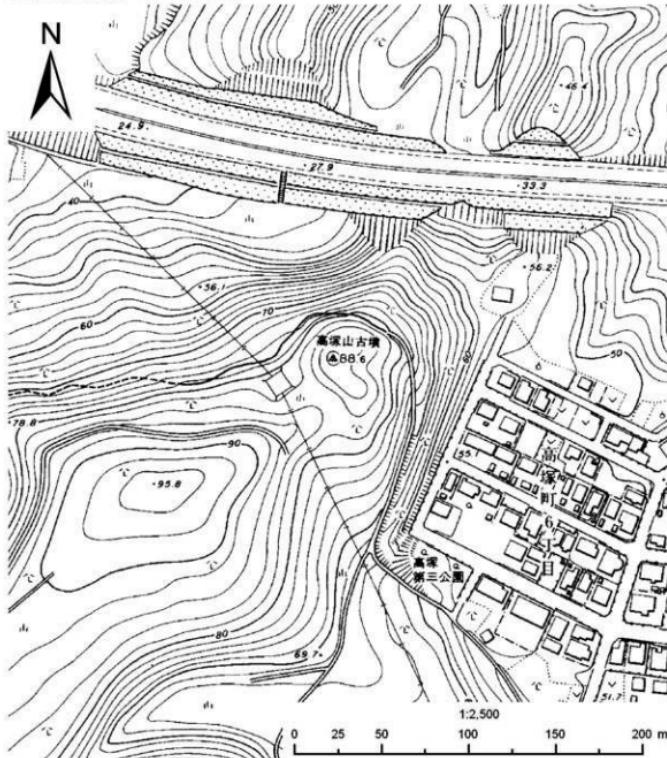


図3 高塚山古墳周辺地形図



写3 高塚山古墳全景



写4 道路側急斜面



写5 後円部からの眺望



写6 墳頂部一級水準点



写7 中部電力の高圧線表示



写8 竹林に覆われた墳丘部



写9 墳丘部（洗掘が生じている）



写10 墳丘部（民地の立入禁止標）



写11 古墳南側の竹林



写12 古墳南側民地（立入禁止表示）



写13 古墳北西側の竹林



写14 住宅側斜面



写15 後円部

4. 高塚山古墳の周辺環境

高塚山古墳周辺には同時期に存在した可能性のある遺跡が点在するが、発掘調査が実施されたものは西方台地A遺跡、中繩遺跡とごく少ない。

・西方台地A遺跡：古墳時代～鎌倉時代

西方台地A遺跡は桑名市の南西部の通称西方台地と呼ばれる標高40～45mの台地の南端部に立地する。宅地造成にかかる緊急発掘調査が平成5年に行われているが、わずかに旧地形が残った部分から小規模な遺物包含層が検出されたのみであった。遺物は須恵器の杯蓋、須恵器の杯、須恵器の甕、土師器の皿、土師器の高杯等が少量出土している。

・中繩遺跡：古墳時代

中繩遺跡は揖斐・長良川の西岸の標高8.5m～9mの沖積面上に立地する。本遺跡は平成5、6年度に行われた遺跡詳細分布調査で発見され、新規登録された遺跡である。平成8年にグラウンド建設にかかる緊急発掘調査が行われているが、約1000m²に渡る広範囲な貝層が検出された。貝層については海～汽水産の貝や魚骨などが大量に含まれており、土師器、須恵器、骨角器、石製品、木製品などが多数出土している。

その他に高塚山古墳周辺には次の遺跡が存在する。

・西方台地B遺跡：古墳時代～鎌倉時代

西方台地A遺跡との間は現在、住宅地となっているが、昭和30年代前半まではこの一带には各時代の遺物が散在していた。その一大中心地である。

・高塚山下遺跡：古墳時代～鎌倉時代

高塚山古墳の南側の大字西方字笠山東方字尾畠に広がる遺物散布地で、土師器片や須恵器片等が表面採取されている。

竹林や桑畠などがあり溜池が点在する閑静な地域であるが、近年は住宅が増加している。

・東方台地遺跡：弥生時代～古墳時代

高塚山古墳の約500m東に位置する遺物散布地で、弥生土器・須恵器が出土している。西方台地A、B遺跡、高塚山下遺跡とは同丘陵にあり、同じ性格を持つ遺跡であると考えられている。

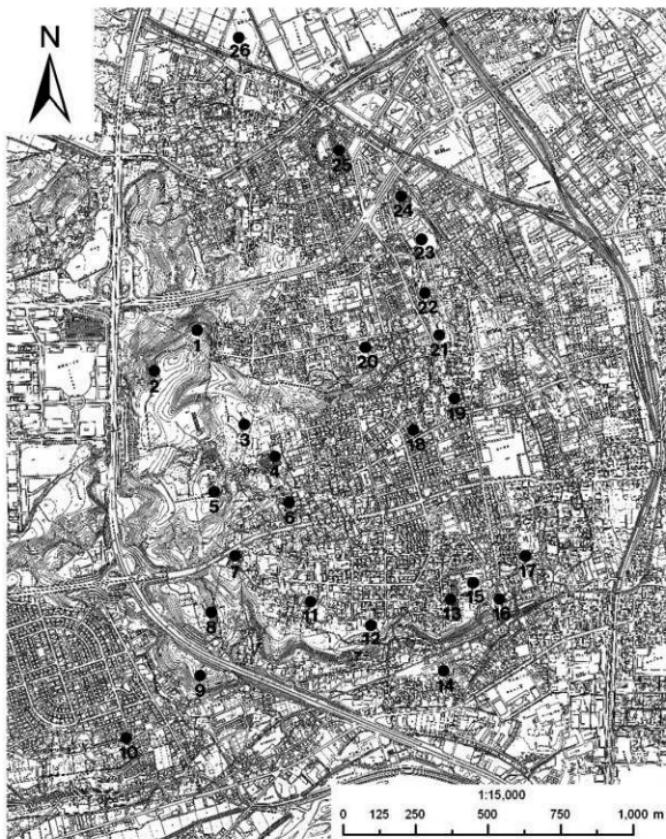


図4 高塚山古墳周辺遺跡分布図

- | | | |
|------------|-----------------|-----------|
| 1 高塚山古墳 | 10 西別所城跡 | 19 東方古窯跡 |
| 2 高塚山遺物散布地 | 11 東浦遺物散布地 | 20 北別所中世墓 |
| 3 高塚山下遺跡 | 12 西方台地A遺跡 | 21 尾畠城跡 |
| 4 西方古窯跡 | 13 西方台地A遺跡遺物出土地 | 22 東方台地城跡 |
| 5 西方城跡 | 14 松ノ下遺物散布地 | 23 白山ヶ鼻城跡 |
| 6 西方座寺 | 15 笠松遺跡 | 24 尾野山城跡 |
| 7 太夫遺物散布地 | 16 矢田城跡 | 25 岸西山遺跡 |
| 8 白山城跡 | 17 愛宕山城跡 | 26 中禪遺跡 |
| 9 万機庵跡 | 18 西方台地B遺跡 | |

第3章 高塚山古墳の基礎調査

1. 高塚山古墳基礎調査の概要

高塚山古墳に初めて考古学的な調査が実施されるのは昭和26年に桑名高校地歴部によつてである。この調査については堀田吉雄『桑名の民俗』に詳しい。その際に円筒埴輪片、朝顔型埴輪が採取されており、現在も同校に保管されている。その後、昭和44年には三重大学歴史研究会原始古代史部会と桑名高校郷土研究部が測量調査を実施し、主軸を南東に向けた前方後円墳で墳長約50m、後円部径30m、同高さ5m、前方部幅約30m、同高さ3.5mという現況の墳丘規模が明らかになった。

今回は遺跡範囲及び墳丘の規模・性格等を明らかにするため、測量、試掘調査、自然科学分析、地中レーダー探査の4つの調査を行つた。

古高塚山古墳実測図

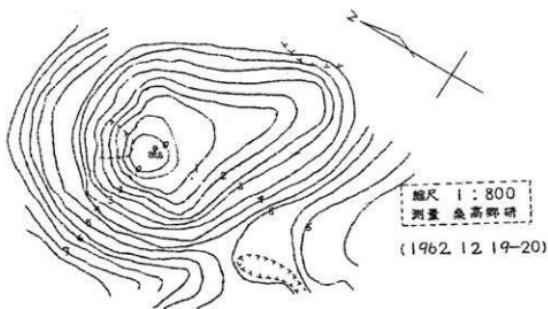


図5 古高塚山古墳実測図 出典：『久波奈』第13号

2. 測量

平成14年度に、現地地形の測量を行った。

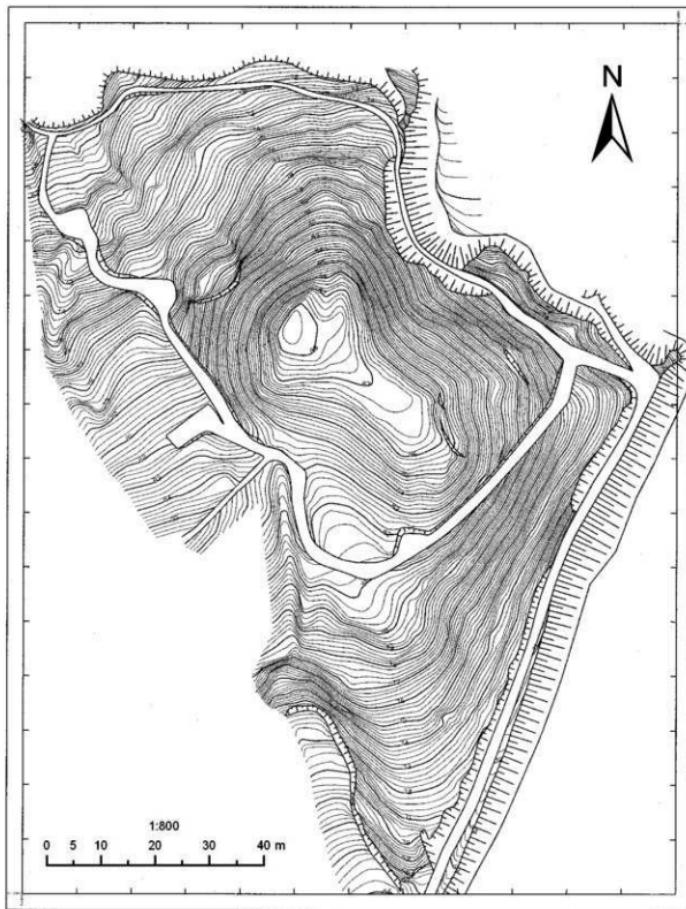


図6 測量図

3. 試掘調査

地中レーダー探査の結果を踏まえて、古墳の東、西、南側に10箇所の試掘坑を設定、それぞれトレンチA～Jとして調査を行った。北側については急峻な崖となっており、崩落の危険があったため試掘坑の設定を行っていない。

なお、試掘坑のうち、トレンチF、G、Iについては他のトレンチの調査状況から掘削の必要がないと判断されたため、試掘を行わなかった。

以下に各トレンチの概要を記す。

(1) 遺構

トレンチ A

前方部と考えられる高まりの頂部から裾部にかけて、長さ21m、幅2mのトレンチを設定し掘削を行ったところ、地山に盛土を行うことによって構築された前方部の墳丘が確認された。盛土の部分は崩落が著しく、埴輪片が主に15層から多数出土したが原位置を保っているものは確認されなかつた。墳丘裾部から南へ約4mの地点から落ち込みが検出された。地形上の制約からさらに南へとトレンチを延長することができなかつたため断定はできないが、周濠の可能性も残る。

トレンチ B

後円部から前方部にかけてのくびれ部と考えられる高まりに、長さ10m、幅2mのトレンチを設定し、掘削を行つた。トレンチの北端で後円部の墳丘裾部が検出された。墳丘の頂部は地山に盛土を行つて構築されており、裾部は地山を削り出すことによつて確保されている。墳丘の直上から多数の埴輪片が出土しているが、原位置のものは確認されなかつた。土師器等は主に8、10層等から出土しており、墳丘が数度に渡つて崩落したことがわかる。

トレンチ C

前方部の墳丘裾部と考えられるなだらかな高まりに、長さ6m、幅2mのトレンチを設定し、掘削を行つた。遺構・遺物は検出されなかつた。

トレンチ D

後円部と考えられる高まりに、長さ9m、幅1mのトレンチを設定し、掘削を行つた。トレンチの西部で、地山に盛土を行うことによつて構築された前方部の墳丘が確認された。遺物は円筒埴輪の小破片が墳丘裾部2層から若干出土している。

トレンチ E

前方部をめぐる周濠と推測される部分に、長さ10m、幅2mのトレンチを設定し、掘削を行つた。遺構・遺物は検出されなかつた。

トレンチ H

後円部の墳丘裾部と推測される部分に、長さ3m、幅2mのトレンチを設定し、掘削を行つた。遺構・遺物は検出されなかつた。

トレンチJ

後円部の墳丘裾部と推測される部分に、長さ8.5m、幅2mのトレンチを設定し、掘削を行った。遺構・遺物は検出されなかった。

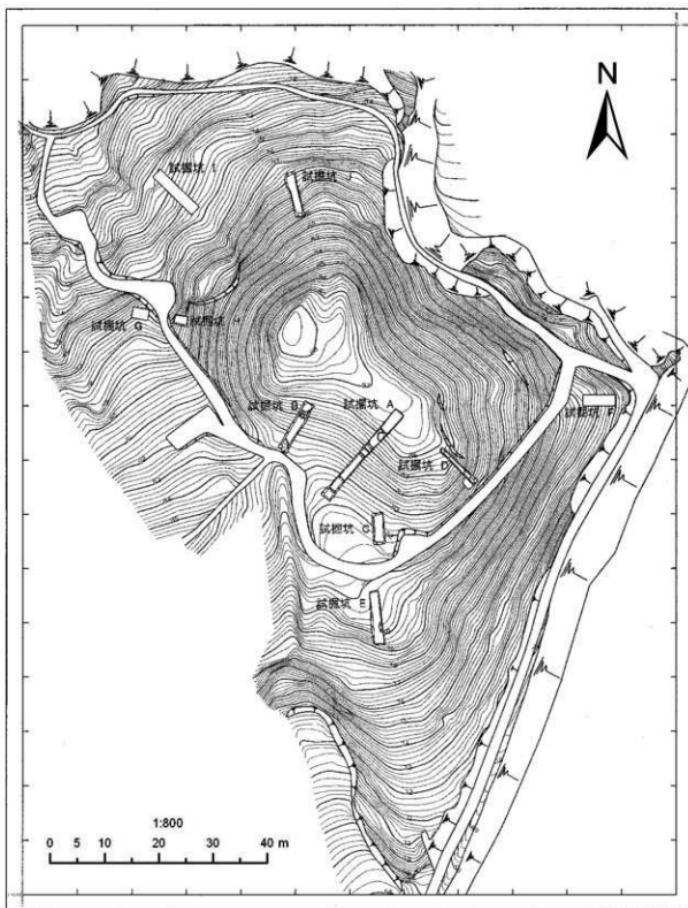


図7 トレンチ位置図

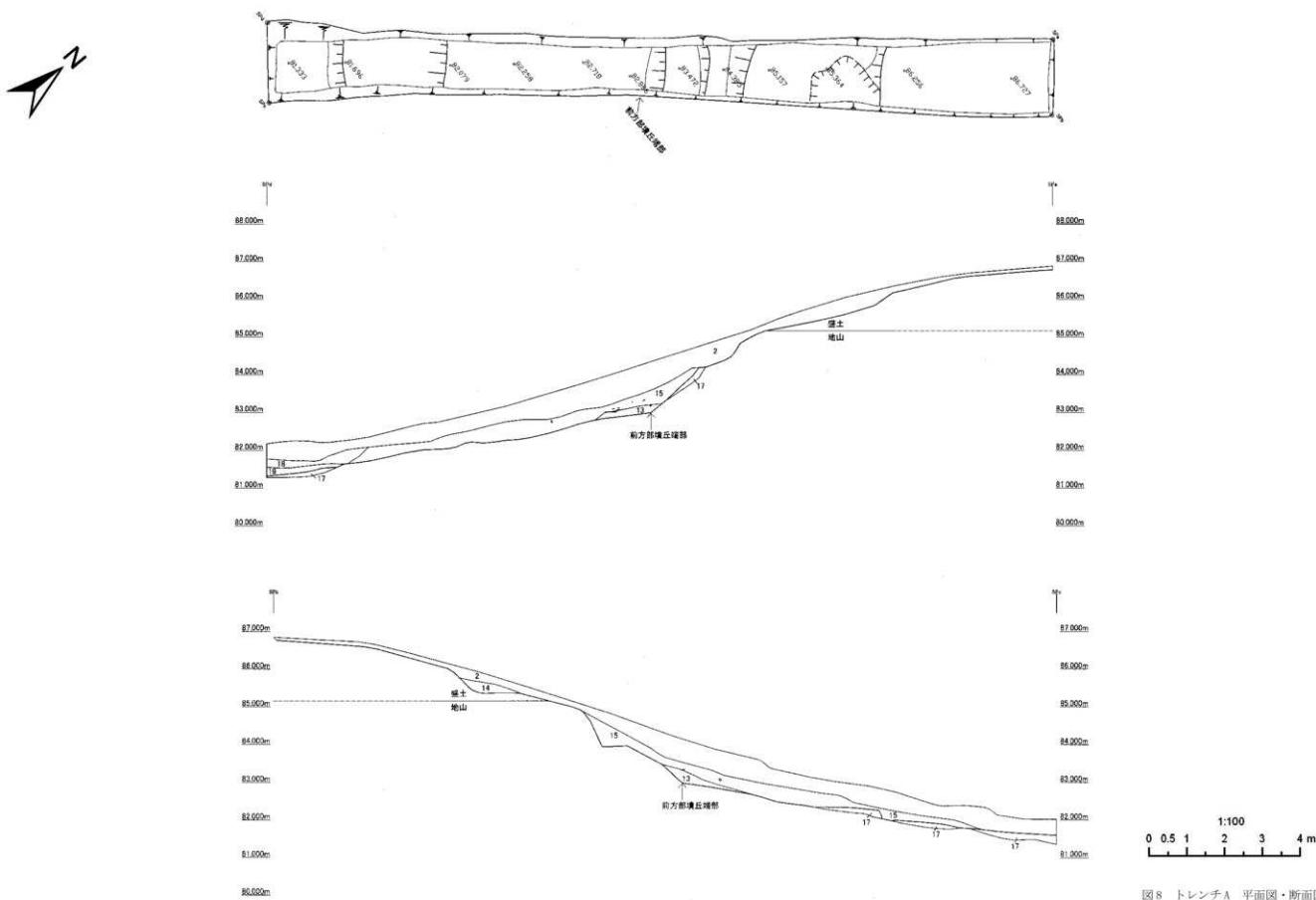


図8 トレンチA 平面図・断面図

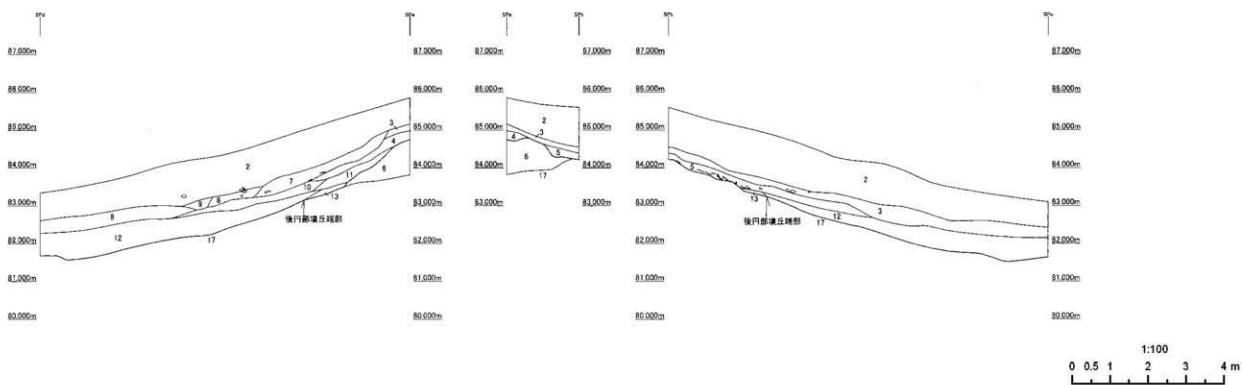
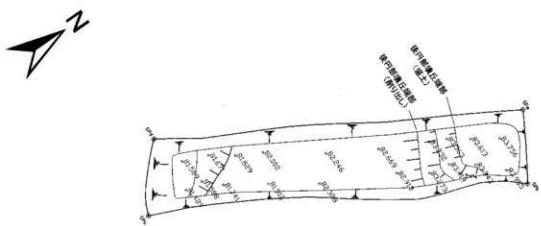


図9 ドレンチB 平面図・断面図

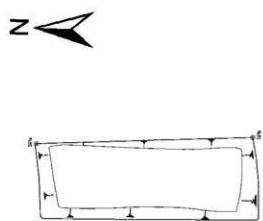


図10 トレンチC 平面図・断面図

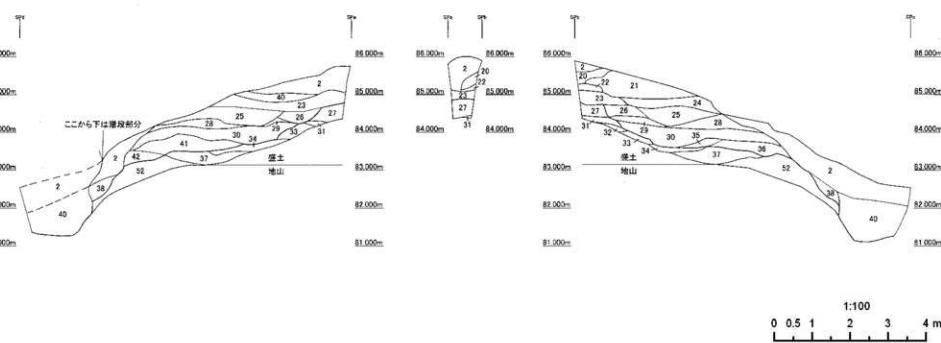


図11 トレンチD 平面図・断面図

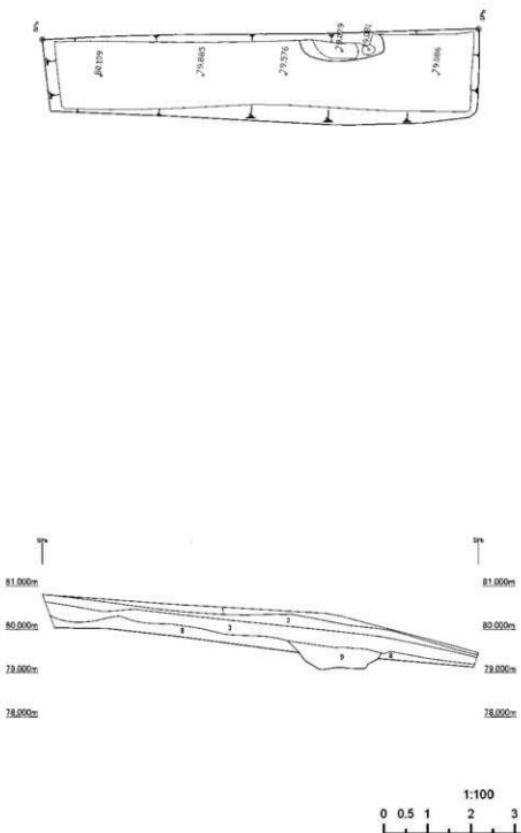


図12 トレンチE 平面図・断面図

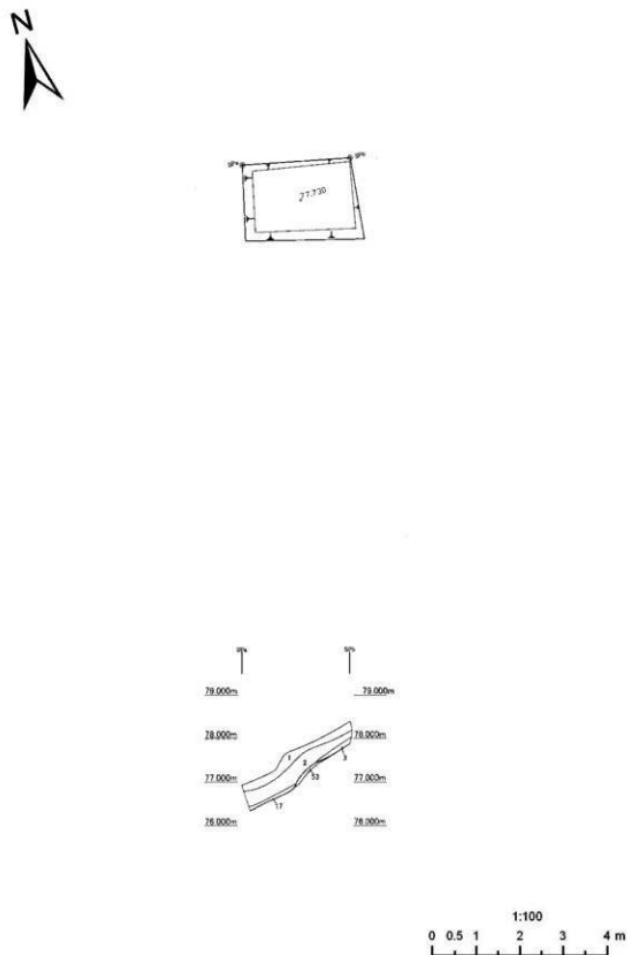


図13 トレンチH 平面図・断面図

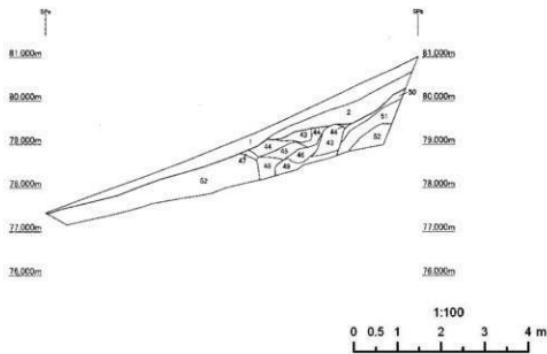


図14 トレンチJ 平面図・断面図

表2 桑名市高塚山古墳 A・B・C・D・E・J・Hトレントチ土層説明

層名	色調マーゼル標記	土色・性質	説	明
1層	-	表土	有機物を含み黒味がある。	
2層	5YR4/6	赤褐色質土	ほぼ均質な層。若干亜円礫を含む。2次的な客土層。	
3層	5YR3/4	暗赤褐色質土	1層より粘性に富む。有機物を含み黒味がある。1層堆積以前の表土層。	
4層	5YR3/6	暗赤褐色質土	ややしまり有り。礫は含まない。	
5層	5YR3/6	暗赤褐色質土	3層に類似する。埴輪片を多く含む。	
6層	5YR3/4	暗赤褐色質土	径10~100ミリ大の亜円礫を多く含む。ベースは赤褐色質土。しまり有り。	埴丘盛土層
7層	5YR4/4	にぶい赤褐色質土	1層より赤味強い。しまり弱い。埴丘の1次崩落土。埴輪片を含む。	
8層	7.5YR4/6	褐色質土	径10ミリ大の亜円礫を若干含む。	
9層	7.5YR3/3	暗褐色質土	炭化物を多く含む。表面近く焼ける。	
10層	7.5YR3/4	暗褐色質土	黒味がある。径10~100ミリ大の亜円礫若干含む。	
11層	5YR4/6	赤褐色質土	固くしまりあり。炭化物粒子若干含む。径10ミリ大の亜円礫含む。	
12層	7.5YR4/6	褐砂礫	径5~10ミリ大の亜円礫を多く含む。よくしまる。	
13層	5YR4/6	赤褐色質土	しまり弱い。埴丘1次崩落土。	
14層	7.5YR4/4	褐色質土	径5~10ミリ大の亜円礫含む。黒味がある。	
15層	7.5YR3/3	暗褐色質土	黒味がある。しまりなし。埴輪片含む。1層堆積以前の表土層。	
16層	7.5YR4/6	褐色質土	黒味がある。しまりなし。径5~10ミリ大の亜円礫を含む。	
17層	7.5YR4/6	褐岩盤	地山岩盤層の風化層。赤味強い。	地山
18層	7.5YR4/4	褐色土	径5~10ミリ大の亜円礫を含む。しまり弱い。	
19層	7.5YR5/8	明褐色粘土	16層と17層の混合土。	
20層	5YR4/4	にぶい赤褐色質土	径5~20ミリ大の亜円礫を含む。ややしまりあり。	埴丘盛土層
21層	5YR3/6	明赤褐色粘土	径5~20ミリ大の亜円礫を含む。ややしまり。19層より赤味強い。	埴丘盛土層
22層	5YR4/6	赤褐色質土	径5~20ミリ大の亜円礫を含む。しまり有り。	埴丘盛土層
23層	5YR4/4	にぶい赤褐色質土	炭化物粒子含む。径10ミリ大の亜円礫若干含む。しまる。	埴丘盛土層
24層	5YR3/6	明赤褐色質土	径5~20ミリ大の亜円礫含む。しまりに欠ける。	埴丘盛土層
25層	5YR4/3	にぶい赤褐色質土	やや黒味がある。径5~20ミリ大の亜円礫含む。バサバサとしまりに欠ける。	埴丘盛土層
26層	5YR3/4	明赤褐色質土	径5~10ミリ大の亜円礫を若干含む。ややしまり有り。	埴丘盛土層
27層	10YR5/4	にぶい黄褐色粘土	灰色粘土ベースに径5~100ミリ大の亜円礫含む。しまり弱い。埴丘盛土層。	埴丘盛土層
28層	7.5YR6/6	橙砂質土	灰砂層ベースに径100ミリ大の亜円礫多く含む。地山ベースの層。	埴丘盛土層
29層	7.5YR3/3	暗褐色粘土	しまり弱い。径5ミリ大亜円礫若干含む。	埴丘盛土層
30層	5YR4/4	にぶい赤褐色粘土	しまり弱い。径5ミリ~10ミリ大の亜円礫若干含む。	埴丘盛土層
31層	7.5YR5/4	褐色土	上面鉛分沈着。径10~20ミリ大の亜円礫含む。	埴丘盛土層
32層	5YR3/6	明赤褐色粘土	地山岩盤ブロック含む。しまり有り。	埴丘盛土層
33層	7.5YR4/3	褐色質土	径5ミリ大の亜円礫含む。	埴丘盛土層
34層	5YR3/6	明赤褐色粘土	地山岩盤ブロック含む。しまり有り。	埴丘盛土層
35層	7.5YR3/4	暗褐色粘土	33層と多分合む。径5~50ミリ大の亜円礫を若干含む。しまりなし。	埴丘盛土層
36層	7.5YR3/4	暗褐色粘土	径5~50ミリ大の亜円礫を若干含む。しまりなし。	埴丘盛土層
37層	5YR3/4	明赤褐色粘土	径5~10ミリ大の亜円礫含む。しまりなし。	埴丘盛土層
38層	5YR4/6	明赤褐色粘土	バサバサして欠ける。径5ミリ大の亜円礫含む。	
39層	5YR4/6	赤褐色粘土	径10ミリ大の亜円礫を含む。しまりなし。	
40層	7.5YR4/4	褐色質土	黒味がある。径5ミリ大の亜円礫若干含む。ややしまる。	
41層	5YR3/4	明赤褐色粘土	しまり弱い。径5ミリ大の亜円礫若干含む。しまり弱い。	埴丘盛土層
42層	5YR4/6	赤褐色質土	地山岩盤ブロック含む。径5~10ミリ大の亜円礫含む。しまり弱い。	埴丘盛土層
43層	7.5YR4/6	褐岩盤	地山岩盤層がブロック状に入る。	地山
44層	5YR4/2	暗褐色粘土	径5~10ミリ大の亜円礫含む。	地山
45層	5YR5/3	にぶい赤褐色粘土	径5~10ミリ大の亜円礫含む。	地山
46層	5YR5/2	暗褐色粘土	地山ブロック含む。	地山
47層	10YR6/4	にぶい黄褐色砂質土	ややしまり有り。	地山
48層	5YR5/3	にぶい赤褐色粘土	径10~20ミリ大の亜円礫含む。	地山
49層	10YR6/4	にぶい黄褐色砂質土	砂質土ベースに地山ブロックを含む。	地山
50層	10YR6/2	灰黃褐色砂質土	ややしまり有り。	地山
51層	10YR6/2	暗褐色砂質土	しまり弱い。	地山
52層	10YR6/4	にぶい黄褐色砂質土	しまり弱い。	地山
53層	10YR6/1	灰褐色質土	粗粒砂。しまり弱い。	地山



写真16 トレンチA



写真17 トレンチB



写真18 トレンチBの遺物出土状況



写真19 トレンチC



写真20 トレンチD



写真21 トレンチE



写真22 トレンチH



写真23 トレンチJ

(2) 遺物

遺物はトレンチA、B、Dの墳丘崩落土を中心に、埴輪、土師器等が出土した。以下に概要を記す。

a. 墓輪

ア. 円筒埴輪

①円筒埴輪

出土した埴輪は殆どがBトレンチで出土したもののが大半で、図示したものについてはAトレンチで出土した2・6・9を除き、すべてBトレンチで出土したものである。

法量

全形が判明する個体は存在しないが、円筒埴輪の底部高は23～27cm、突帯の間隔は基本的に17cmで、口縁部と最上段の突帯は他よりも狭く10～11cmである。以上の数値を参考に復元すると、器高85cm前後で4条5段になるものと推定される。朝顔形埴輪については明確ではないが、8段前後になると推定される。

胎土と色調

淡黄色・淡い黄褐色。黄色などがある。胎土は1～3mmの白砂粒・金雲母を含む。

焼成

ほとんどの個体で黒斑が確認できることから酸化焰焼成である。窓窯焼成のものは確認されていない。

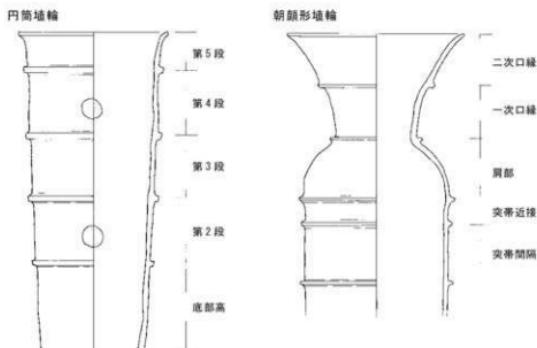


図15 円筒埴輪部分名称図

突帯

突帯は台形とM字形を呈するタイプがある。台形のものは側辺がやや窪むものと窪みをもたないものがある。突帯の突出度は約1.2cm程度である。中には突帯の突出度が1.5cmと高いものもある。M字形のものの中には上辺が長いものや、突出度が低く下辺が短いもの、各辺を強くヨコナデするため湾曲したM字を呈するものもある。

口縁部

口縁部は外反するものと、端部が屈曲するタイプがある。また、図示していないが、強くヨコナデし低い突帯状をなすものも少數ある。端部は面をもつもの、強くヨコナデをするため、凹面をなすもの、ゆるく外反し、端部は面をもたず、丸く仕上げるものがある。

透孔

透かし孔はすべて円形で、1段につき2孔ずつ、円筒埴輪の場合、第2段と第4段にそれぞれ穿孔される。

器面調整

外面にはタテハケを施したのち、円筒中段部を中心にして断続的ないわゆるA種ヨコハケ、ないしは、ストロークの長いヨコハケ(Ca種ヨコハケ)が施されるが、ナナメハケのみで終わるものもある。ハケの原体幅は5cm前後とみられる。図示していないものの中には丁寧にナデを施すものもある。内面はランダムなタテハケ・ヨコハケで、突帯部分は丁寧にヨコナデされる個体が多い。なお、ハケの静止痕が残る「B種ヨコハケ」は今回出土した資料では確認されていない。

突帯設定技法

突帯の剥離した箇所には顕著に方形の刺突痕(以下「方形刺突」と呼称)が明瞭に確認出来、沈線等は用いられていない。

1は円筒部3段目から口縁部にかけての残存する。口径は41.4cmで残存高は47cmである。4段目には円形の透かし孔がある。口縁部は他の突帯より間隔が狭く10.5cmで、外方に緩く外反する。2も口縁部の破片で、最上段の突帯と口縁部の間隔は10cmと突帯間隔より狭い。口縁端部は折り曲げたように下方に突出するように屈曲し、端部は面をもつ。突帯はM字形である。3も口縁部の破片である。浅黄橙色で、突帯は鋭利なM字形を呈し、端部は強いヨコナデのため下方にやや突出する。外面調整はナナメハケの後、部分的にヨコハケが施される。口縁部の間隔は14cmである。4も口縁部の破片であるが、口縁部は外反して外方に開く。端部は四角くおさめ、面をもつ。突帯が剥離した箇所には方形刺突が明瞭に確認できる。内面は最上段の突帯から口縁部にかけて丁寧にヨコナデが行われる。5は基底部から4段目の一部まで残存する。残存高約70cm基底部高は24cmで突帯間隔は17cmである。外面調整はナナメハケが主体であるが一部ストロークの長いヨコハケが施されている。内面はナナメ・タテハケで基底部にはヨコナデが確認できる。6は2段から4段目の破片である。4段目はやや膨らみをも

ち、2・4段目には円形の透かしが穿孔される。7・8は円筒埴輪の胸部の破片である。7はおそらく2段目から4段目にかけての破片であろう。2段目と4段目にはそれぞれ径5cmの円形の透かしが穿孔される。外面はタテハケの後、一部ストロークの長いヨコハケが施されている。8の外面にはランダムなナナメハケの後、断続的なA種ヨコハケが施されていることが明瞭に確認できる。突帯は断面台形で側辺は若干窪む。突帯間隔は17cmである。内面はタテハケのちヨコハケであるが、突帯貼り付け部分は丁寧にヨコナデされハケは消されている。9は基底部から第2段までの破片で、基底部高は24cmで、径は28cmである。基底部・2段目とともに外面はタテハケの後、部分的にストロークの長いヨコハケを施す。ヨコハケの静止痕はみられないため少なくとも全周のうち1/2近くは止まらずに一気に行われるようである。内面には基底部にはタテハケ、2段目にはヨコハケで調整され、突帯部分は擦り消されている。10は胸部の破片で外面には黒斑がみられる。突帯は重厚に成形され、幅1.3cmあり、強くヨコナデされるため側辺は丸く窪む。外面はナナメ方向のハケが確認でき、円形の透かし孔が確認出来る。内面には工具による爪状の刺突痕が若干残る。11は黒斑をもち赤彩がみられる。外面調整はナナメハケののち、部分的にストロークの長いヨコハケが確認できるが、円形の透かしをもつ段には前面にヨコハケが確認出来る。透かし孔の周りには25と同様に円形の剥離痕がみられる。内面には僅かに粘土の接合痕が残るが、殆どヨコハケ・ナデによってかき消されている。12は外面に赤彩が残り、黒斑も確認できる破片で、突帯は幅1.2cmほどで、貼り付けの際のヨコナデにより突帯側辺の中央が窪むため、断面はM字形を呈する。外面調整はタテハケののち、ストロークの長いヨコハケが施される。ハケの幅は約3cm、ハケメは1cmにつき9本ほどである。内面はタテハケののち、ナデにより極力ハケを擦り消しており平滑に仕上げる。

②朝顔形埴輪

13は肩部から口縁部が良好に残存する。口縁部は口径48.6cmで1次口縁はやや立ち上がりが高く外反し、端部に2次口縁を積み上げていく。頸部のくびれ部分の径は25.6cmである。外面の調整はタテハケが施されるが2次口縁にはストロークの長いヨコハケが丁寧に全面施されている。内面には斜め方向のハケが施される。外面には若干赤色顔料が残っている。14は口縁部で、13よりも若干低いタイプのものである。外面には1次調整のタテハケののち2次口縁を中心部分的にストロークの長いヨコハケが施される。内面にはヨコハケが施される。口縁部の突帯は幅0.6cmほどで断面方形である。突出度はそれほど高くはないが、つくりはシャープである。頸部には突帯が剥離した痕跡がみられるが、方形刺突は確認できず、ヨコナデがみられるのみである。15も口縁部の破片で、端部は屈曲する。外面にはヨコハケが確認できる。16は円筒の上半部である。円筒部の径は47.6cm、最上段突帯の間隔が7cmと他の突帯間より狭く、特殊器台形埴輪の二重口縁が退化して近接する2条の突帯に変化したと考えられている、いわゆる「突帯近接タイプ」という特徴をもつ資料である。器面の調整は風化のため不明であるが、他の円筒埴輪よりも器壁が0.9cm前後とやや薄手で、突帯の突出度も1.5cmほどより高く鋭利な台形を呈する。外面調整は風化のため確認しづらいが一部A種ヨコハケが確認でき、内面は丁寧にヨコナデが施される。円形の透かし孔が確認出来る。外面に若干赤色顔料が残る。



図 16 出土遺物実測図

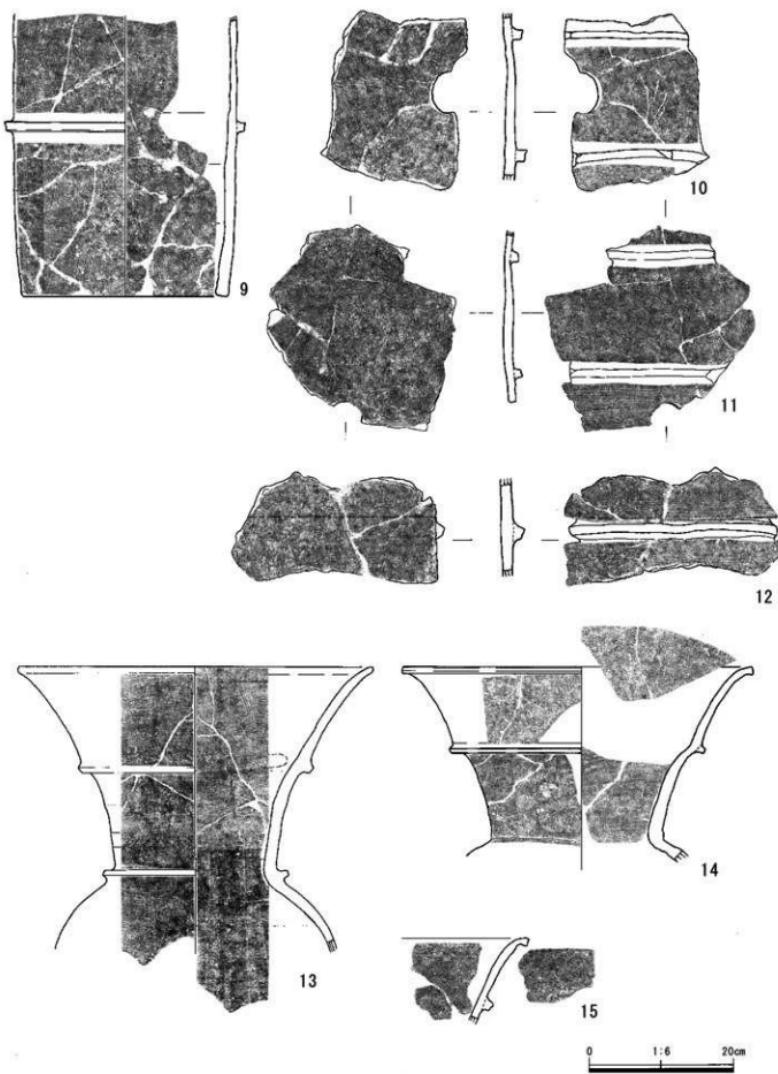


図17 出土遺物実測図

イ. 形象埴輪

①盾形埴輪

7個体ほど確認している。17は円筒部の上部・盾面の4分の1ほどが欠損するが全体的に残存状況は良好であり、全形が判明する個体である。残存高は99.3cmである。円筒部に長方形の盾面を貼り付けて製作されている。盾目の高さは72cm、幅は55cmで縱長の長方形である。盾面は回字形に区画され、内外区の四隅をつなぐ斜線がある。外区の外縁は綾杉文が施され、上部の外区にはヨコハケが、下部にはタテハケのちヨコハケが施されている。その界線を挟んだ内側には、一旦、鉢齒文を描いたものの擦り消しているのが観察できる。内区は無文である。円筒部は径34.5cmでやや梢円形を呈する。盾面との接合は円筒部を利用し盾面を形成し、盾面の周辺部を貼り付け、円筒部との間にくさび形の粘土を挟み、突帯によって固定したものである。円筒部には円形透かしが確認できる。円筒部の外面にはタテハケが、内面はタテハケと2段目にはヨコハケが確認できる。

18は盾面の破片で、盾面は17と同様に回字形に区画され、内外区の四隅をつなぐ斜線がある。綾杉文はみられない。外面には赤彩が全面にみられる19は円筒の一部とそれに接合された盾面の破片で、盾面外区には外向きの鉢齒文が施され、線を挟み、内向きの鉢齒文を施す。線刻は鋭利な工具で非常に丁寧に描かれている。厚さは2cmである。盾面の外面に黒斑・赤彩がみられる。20も外区から外向き・内向きの鉢齒文が施されるが、上向きの鉢齒文の表現があることから盾面は「II字形」に区画されるタイプと考えられ、22も同様の破片である。21・22も盾面の破片で、19・20と同じII字形区画で、鉢齒文を主体としており綾杉文表現のないタイプのものであろう。21は浅黄色で、線を挟んで上向きの鉢齒文を描く、また、裏面に円筒部との接合部は確認できないが、他の盾形埴輪と比較しても、器壁が薄手で、やや丸みを帯

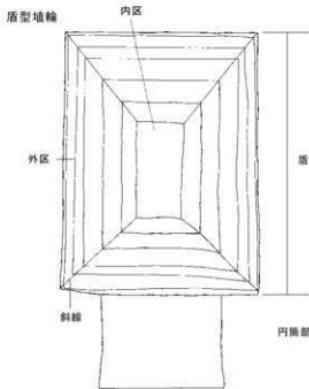


図18 盾形埴輪部分名称図

びており、円筒部との接合パターン、もしくは線刻パターンが異なる可能性がある。23は盾形埴輪の円筒部の破片である。

25は盾形埴輪の円筒部と考えられるもので、口縁部の径は43cmである。円形の透かし孔が確認できる。図上ではわかりにくいが、透かし孔の周間に円形に剥離痕が確認できることから環状の板を貼り付けていたものとみられる。なお、後に触れる角状突起(32)はこれには接合しない。外調整はタテハケの後に断続的なヨコハケが明瞭に確認できる。突帯は断面M字形で、突帯の剥離した箇所には方形刺突痕がある。黒斑と赤彩が確認できる。内面にはナナメ方向のヨコハケが残るが、基本的にはナデにより消されている。

②蓋形埴輪

蓋形埴輪は笠部と円筒部の破片のみの出土で、立ち飾りなどの破片は確認されておらず、全形を復元できるような破片はない。26～29はいずれも笠縁部の破片である。27は笠部の放射状の線刻は確認できず、方形の小さな突起状の段差表現がみられるのみである。外面には若干ヨコハケが残るが、ナデにより消されている。表面には黒斑が確認出来る。26は線刻も段差表現も確認できない無文の破片である。外面にはヨコハケが確認できる。外面には赤彩が僅かしか残っていないが、内面にはよく残る。28も26同様に無文の笠縁部である。内外ともに赤色顔料が残る。29も笠縁部の破片であるが、文様や段差表現は確認できない。

③特殊な埴輪

24は扇形とも板面付き円筒埴輪ともいいうような特殊な埴輪である。円筒部に盾と同様の長方形の板を貼りつけるものの、板部分には同じ高さに2箇所、間隔を開けて径5cmほどの円形の透かしを穿孔する。円筒部の上部は丸みをおび、突帯の間隔が近接している。朝顔の肩部のようにすぼまっていくことから、おそらく口縁部のない朝顔形埴輪に盾状の板を取り付けた特異な埴輪であろう。なお、円筒部と板面の接合には突帯部分に粘土を継ぎ足し板状にしたうえで、円筒最上部には何かを挿し込むためと考えられる、径3cmほどの円形の孔を穿孔(写26参照)している。板面にはランダムなタテハケのち、部分的にストロークの長いヨコハケを施す。表面には黒斑と赤色顔料が残る。

30はハの字に開き、裾広がりになる埴輪で、中央部に径3cmほどの小さな円形の透かしがある。器台形埴輪、もしくは高杯形埴輪の可能性が考えられる。外面には幅3cmほどの単位でタテハケが施される。内面は、ヨコハケのちナデ調整である。外面には赤彩が残る。31は円筒形を呈するが、径が小さく基底部からくびれながら外方に開くため蓋形埴輪の台部に相当する可能性がある。中央部には径3cmの小さめの円形の透かし孔が確認できる。外面には幅2cmの細かい9～10本/cmのタテハケが施され、内面はタテナデである。基底部に黒斑が確認出来る。32は角状突起の破片で、巴文の尾部と考えられている。どの埴輪に貼りつけられていたかは不明である。

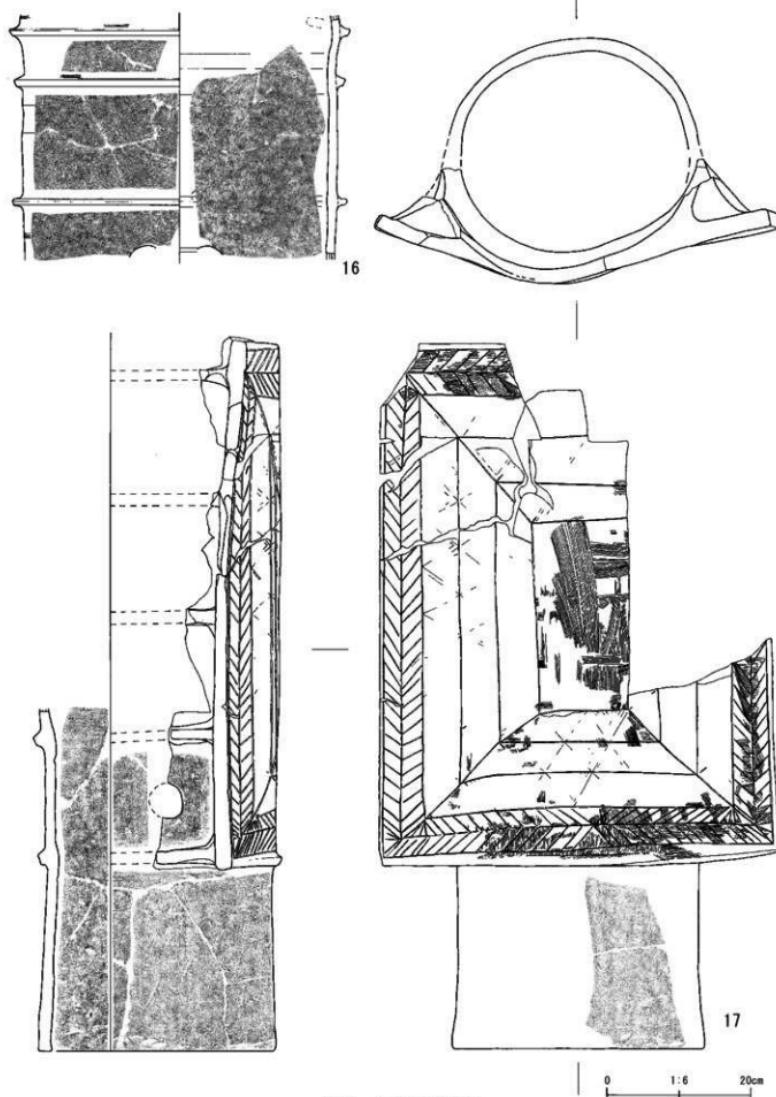


図19 出土遺物実測図

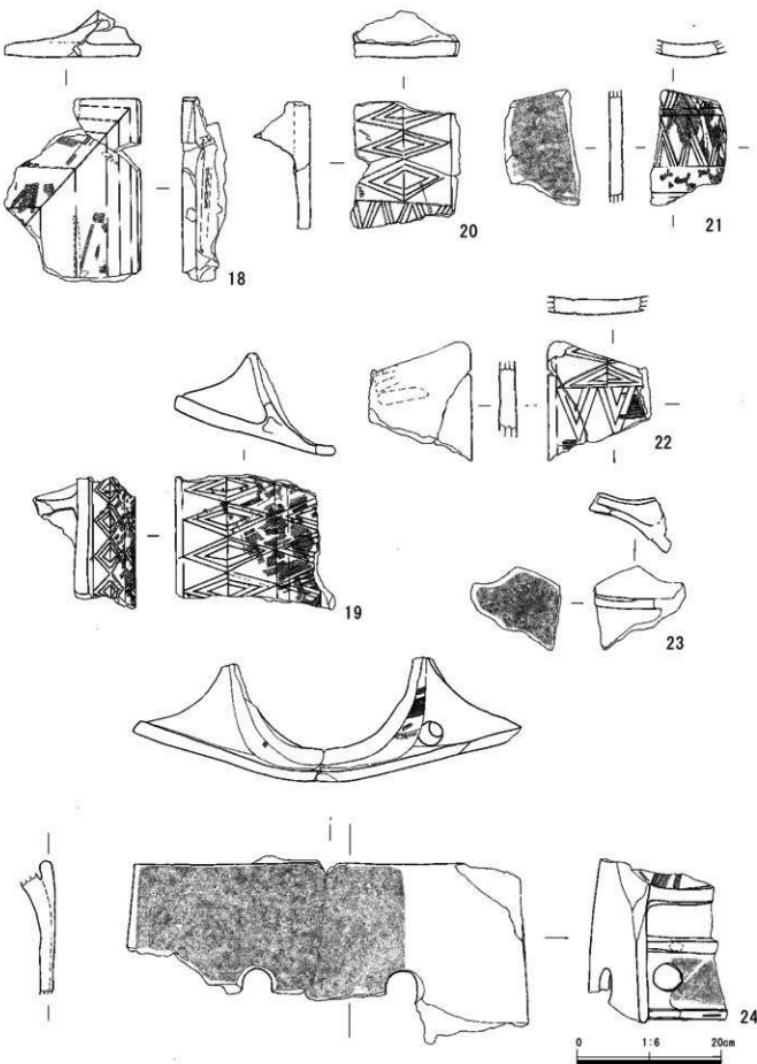


図20 出土遺物実測図

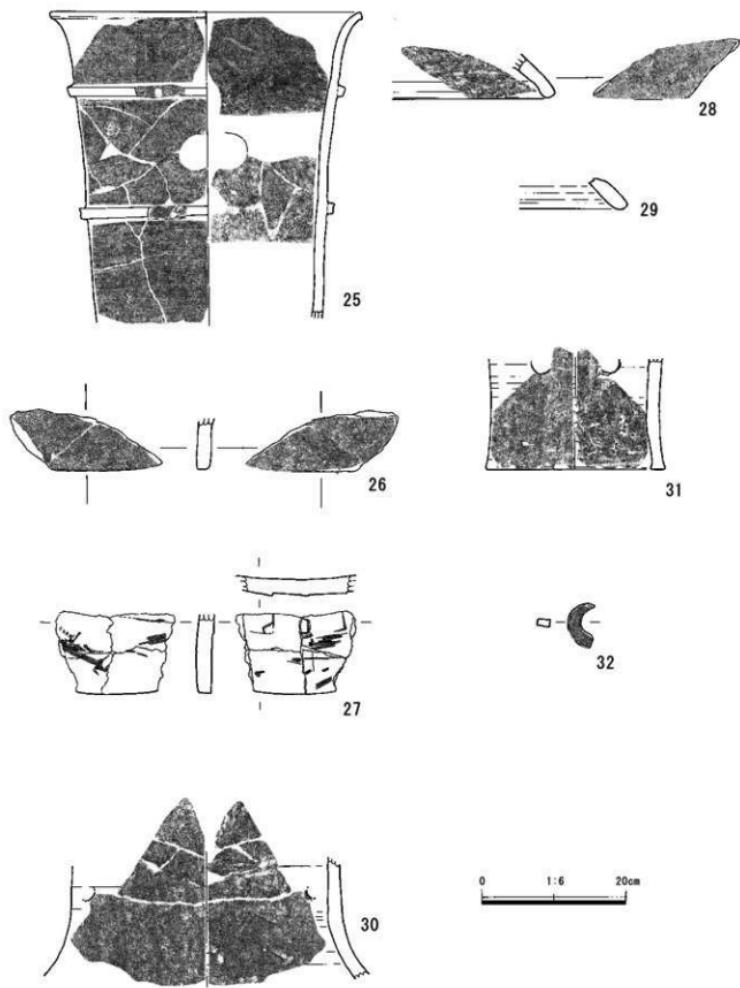


図21 出土遺物実測図

表 3 出土植物遗存表

報告書番号	整理番号	出土場所など	器種	口径	基底	部格	高さ(cm)	外面調整		内面調整
								量	付け	
1	19	トレンチB 5層	埴輪 円筒埴輪	(41.2)	—	—	—	タテハケ→突帯粘付け→ヨコナデ	タテハケ→突帯内面部分	
2	189	トレンチA 包含層	埴輪 円筒埴輪	(37.9)	—	—	—	タテハケ→突帯粘付け→ヨコナデ	タテハケ→突帯内面部分	
3	25	トレンチB 包含層	埴輪 円筒埴輪	—	—	—	—	カ輪ヨコハケ	ヨコハケ→口縁部ナデ	
4	23	トレンチB 5層	埴輪 円筒埴輪	—	—	—	—	タテハケ→方形網刷→突帯點	タテハケ→口縁部ナデ	
5	114	トレンチB 5層	埴輪 円筒埴輪	—	(27.0)	—	—	リ付け→ヨコハケ→突帯粘付け→ヨコナデ	タテハケ→突帯内面部分	
6	188	トレンチA 包含層	埴輪 円筒埴輪	—	—	—	—	タテハケ→突帯粘付け→ヨコハケ	タテハケ→突帯内面部分	
7	69	トレンチB 5層	埴輪 円筒埴輪	—	—	—	—	タテハケ→突帯粘付け→ヨコハケ	タテハケ→突帯内面部分	
8	42	トレンチB 5層	埴輪 円筒埴輪	—	—	—	—	タテハケ→突帯粘付け→A種ヨコハケ	タテハケ→突帯外面部分	
9	187	トレンチA 包含層	埴輪 円筒埴輪	—	(28.1)	—	—	ナトメハケ→ヨコハケ	ナトメハケ→ヨコナデ	
10	58	トレンチB 5層	埴輪 円筒埴輪	—	—	—	—	タテハケ?→突帯粘付け→ナトメハケ	タテハケ?→突帯内面部分	黒斑あり
11	26	トレンチB 5層	埴輪 円筒埴輪	—	—	—	—	ナトメハケ→突帯粘付け→カ輪ヨコハケ	ナトメハケ→突帯内面部分	黒斑・赤彩あり
12	71	トレンチB 5層	埴輪 円筒埴輪	—	—	—	—	タテハケ→突帯粘付け→カ輪ヨコハケ	タテハケ→突帯内面部分	黒斑・赤彩あり
13	20	トレンチB 5層	埴輪 朝顔形埴輪	(48.6)	—	—	—	タテハケ→突帯粘付け→ヨコナデマナデ	タテハケ→突帯内面部分	赤彩あり
14	86	トレンチB 5層	埴輪 朝顔形埴輪	(49.8)	—	—	—	タテハケ→突帯粘付け→ヨコナデマナデ	タテハケ→突帯内面部分	赤彩あり
15	52	トレンチB 5層	埴輪 朝顔形埴輪	—	—	—	—	ヨコハケ→突帯粘付け→口縁部ナデ	ヨコハケ→突帯内面部分	
16	54	トレンチB 5層	埴輪 朝顔形埴輪	—	—	—	—	透孔貼り付け→A種ヨコハケ	透孔貼り付け→A種ヨコハケ	赤彩あり、口縁近接

※法量の復元値は、（ ）で示した。

報告書番号	整理番号	出土場所など	器種	口径	法量(cm)	外面部		内面調整	備考
						基底部直径	器高		
17	18	トレンチB 8層	埴輪 屋形埴輪	—	(97.6)	(周面) ランダムミドリケー外区 縁刻→外区縁刻→瓶形文→ 瓶底文割り削し→瓶形文	(円筒) ランダムミドリケーハケ 一突普段貼り付け→ヨコハケ →透かし穿孔	黒斑・赤彩あり	※自然科学分析を実施 (第3章4 ①形状記録)
18	160	トレンチB 包含層	埴輪 屋形埴輪	—	—	(周面) ランダムミドリケー外区 縁刻→外区縁刻	(円筒) タテハケ	赤彩あり	
19	37	トレンチB 5層	埴輪 屋形埴輪	—	—	(周面) ランダムミドリケー外区 縁刻→外区縁刻	—	黒斑・赤彩あり	
20	85	トレンチB 包含層	埴輪 屋形埴輪	—	—	(周面) ランダムミドリケー外区 縁刻→外区縁刻→瓶形文	—	黒斑・赤彩あり	
21	38	トレンチB 5層	埴輪 屋形埴輪	—	—	(周面) ランダムミドリケー外区 縁刻→外区縁刻→外区縁刻→ 内区縁刻→瓶形文	タテハケ→ヨコハケ→ナデ	黒斑あり	
22	108	トレンチB 包含層	埴輪 屋形埴輪	—	—	(周面) ヨコハケ→外区縁刻→ 内区縁刻→瓶形文	タテハケ→ナデ	黒斑・赤彩あり	
23	159	トレンチB 包含層	埴輪 屋形埴輪	—	—	(周面) ヨコハケ→外区縁刻→ 内区縁刻→瓶形文	タテハケ→ナデ	黒斑・赤彩あり	
24	36	トレンチB 5層	埴輪 窪埴輪?	—	—	(周面) ヨコハケ→ナナハケ→ 透かし穿孔	(円筒部) ヨコハケ タテハケ→窓部内面部分	黒斑・赤彩あり	
25	53	トレンチB 包含層	埴輪 屋形埴輪	—	—	(周面) ヨコハケ→外区縁刻→ 内区縁刻→格上貼り付け	タテハケ→窓部内面部分 ヨコハケ	黒斑・赤彩あり	
26	27	トレンチB 5層	埴輪 窪形埴輪	—	—	(周面) ヨコハケ	ナデ	黒斑・赤彩あり	
27	147	トレンチB 重機泥剝	埴輪 窪形埴輪	—	—	(周面) ヨコハケ→段差表現→ナデ	ヨコハケ→ナデ	黒斑あり	
28	24	トレンチB 5層	埴輪 窪形埴輪	—	—	(周面) ヨコハケ→ナデ	ナデ	赤彩あり	
29	88	包含層	埴輪 窪形埴輪	—	—	(周面) ヨコハケ→ナデ	ナデ		
30	172	トレンチB 8層	埴輪 高杯・器台?	—	(24.3)	タテハケ→透かし穿孔	ヨコハケ	赤彩あり	
31	168	トレンチB 8層	埴輪 窪形埴輪?	—	—	タテハケ	透形埴輪の台部か。		
32	83	トレンチB 包含層	埴輪 角状突起	—	—	—	—		

※法量の復元値は、()で示した。



1



13

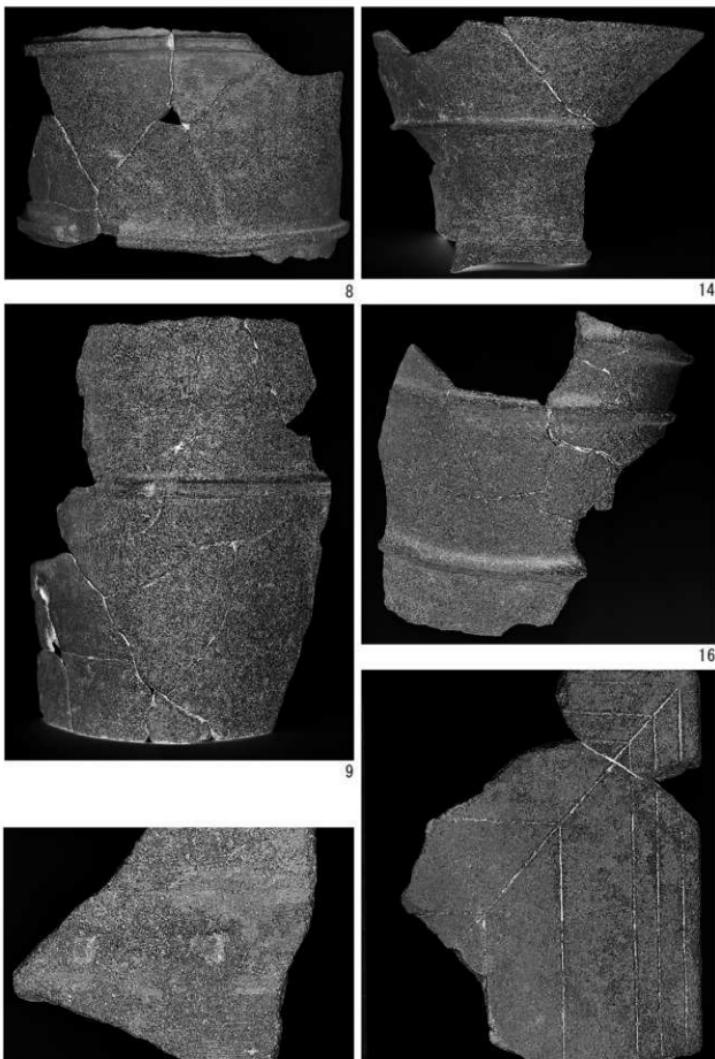


17



17

写24 出土遺物写真（復元後）

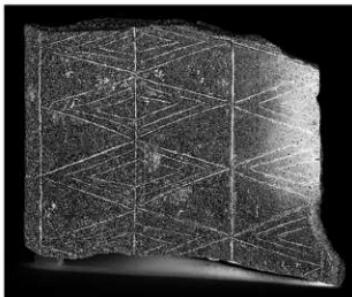


方形刺突痕

写 25 出土遺物写真

18

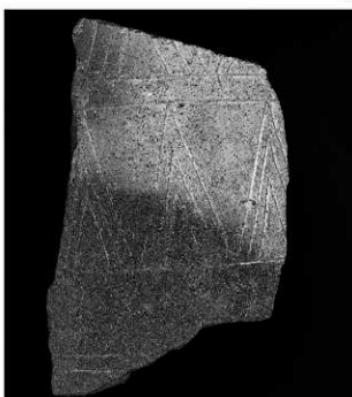
39



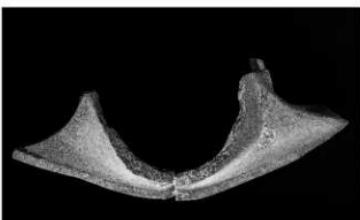
19



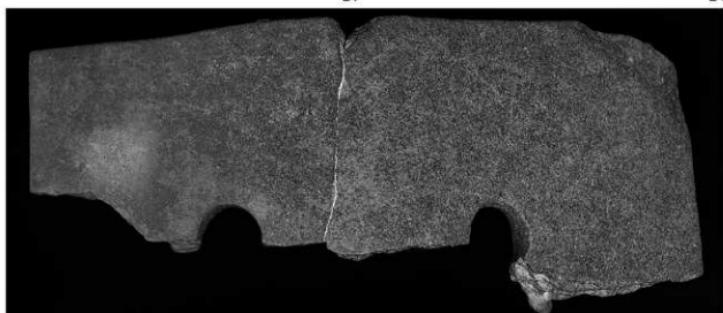
20



21



24

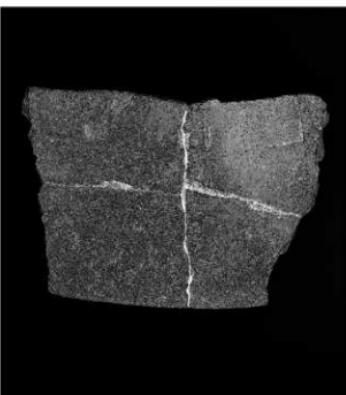


24

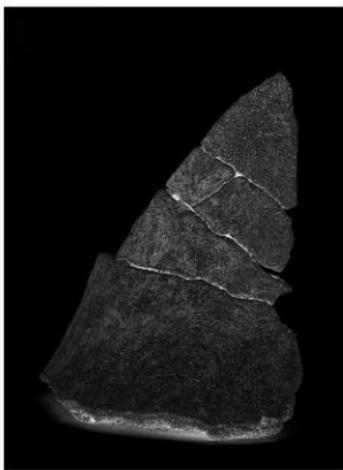
写26 出土遺物写真



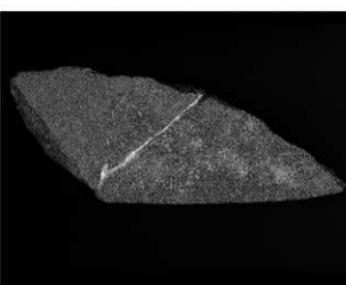
24



27



30



28



32

写27 出土遺物写真

b. 土器

土器はくびれ部に近いBトレンチから比較的まとまって出土しており、赤彩が認められるものが多い。

笊形土器（33・34）

内外面に笊の圧痕をつけた土器で、高塚山古墳はくびれ部に近いBトレンチから小型の土器とともに出土している。全体形状がわかる個体はないが、複数個体の存在が確認されている。（33）は口縁部の破片である。内外面に笊の圧痕がつく。器壁の厚さは0.8cm程度で、口縁部は丸くおさめる。（34）は平底の底部から体部へと続く破片で、やはり内外面に笊の圧痕がみられる。

土師器高杯（40～45）

出土土器のなかでもっとも多いのは高杯で、口径9～10cm程度の小型品（39～41）と12.7cm前後の中型品（43～45）に分類できる。杯部の形態は底部と体部の境が不明瞭であり、脚部は脚柱部から裾部への屈曲が明瞭なもの（44・45）とやや不明瞭なもの（41）がある。内外面にハケメが認められるものがある。

土師器小型丸底土器（35～37）

球形の体部に口縁部が外側に開くもの（36・37）と、やや内寄しながら開くもの（35）がある。口径は7.5～7.8cmである。

土師器広口壺（47～49）

口縁部の破片で、口径15.9～23.8cm、外上方に直線的に開くが、（48）は端部で強く外反している。

土師器壙（46）

丸底で球形の体部に頸部からやや段をなし、外上方へ直線的に開く口縁部からなる。口径10.7cm、器高12.5cmをはかる。内外面にハケメがみられる。

土師器小型器台（38・39）

小型の器台で、外上方に直線的に開く受部とゆるやかに外反しながら開く脚部からなる。口径6.2～6.5cm、脚裾径7.1～7.5cmで、（39）には脚部外面にハケメが認められる。

これらの土器は、古墳に対する何らかの儀礼行為に伴ってまとめて使用・破棄された可能性が高い。小型器台がみられるなどの古相を残すが、全体として松戸I式の新しい段階に相当する一群と捉えることができる。

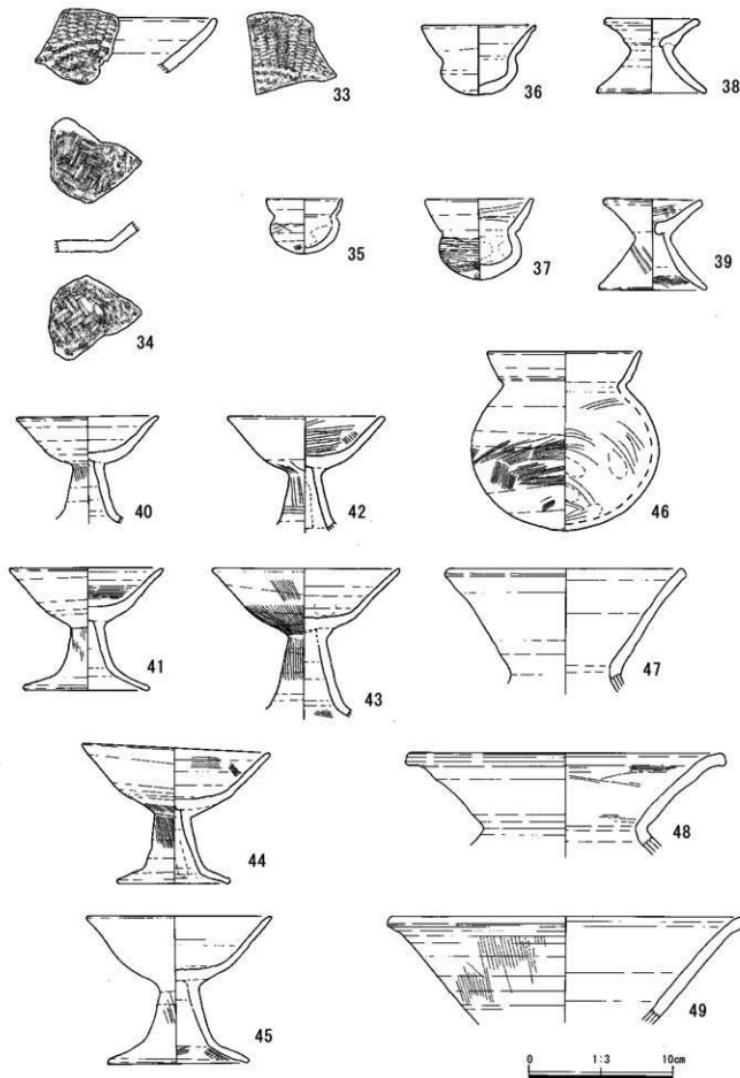


図22 出土遺物実測図

表4 出土遺物観察表

報告書番号	整理番号	遺跡名	層位・構	器種	法量(cm)		調査・技法の特徴等
					口径	高台径	
33	13	高塚山古墳	トレンチB 包含層	筒形土器	—	—	内外面荒の生痕
34	15	高塚山古墳	トレンチB 包含層	筒形土器	—	—	内外面荒の生痕
35	2	高塚山古墳	トレンチB 5層	土師器 小形丸底土器	5.1	—	3.8 内外面朱剥離、外面ハケメ
36	10	高塚山古墳	トレンチB 包含層	土師器 小形丸底土器	7.7	—	4.9 内外面朱剥離、磨耗
37	11	高塚山古墳	トレンチB 包含層	土師器 小形丸底土器	7.2	—	5.6 内外面朱剥離、ハケメ
38	7	高塚山古墳	トレンチB 5層	土師器 小型器台	(6.2)	(7.5)	磨耗
39	12	高塚山古墳	トレンチB 包含層	土師器 小型器台	6.5	7.1	6.3 脚部外面ハケメ
40	4	高塚山古墳	トレンチB 8層	土師器 高杯	(9.7)	—	外面ハケメ
41	3	高塚山古墳	トレンチB 5層	土師器 高杯	10.4	8.4	8.4 杯部外面・脚部外面ハケメ
42	16	高塚山古墳	トレンチB 5層	土師器 高杯	10.5	—	— 内外面ハケメ、杯内面朱剥離、
43	6	高塚山古墳	トレンチB 8層	土師器 高杯	12.7	—	— 脚部内外・杯部外面にハケメ、外面朱剥離
44	5	高塚山古墳	トレンチB 8層	土師器 高杯	12.7	7.5	9.4 杯部内面・脚部外面にハケメ、朱剥離
45	9	高塚山古墳	トレンチB 5層	土師器 高杯	12.6	9.4	10.2 高台内・外ハケメ、杯部内面朱剥離
46	1	高塚山古墳	トレンチB 5層	土師器 坩	10.4	—	12.4 内外面ハケメ、頭部外面朱剥離
47	8	高塚山古墳	トレンチB 5層	土師器 広口壺	(15.9)	—	— 磨耗
48	21	高塚山古墳	トレンチB 5層	土師器 広口壺	(20.4)	—	— 朱剥離、磨耗、内面ハケメ
49	22	高塚山古墳	トレンチB 5層	土師器 広口壺	(23.8)	—	— 朱剥離、磨耗、内面ハケメ

※法量の復元値は、()で示した。



33



33



34



34



35



39



45



46

写28 出土遺物写真

4. 自然科学分析

埴輪に施された赤色顔料について、成分分析を行った。以下に概要を記す。

【分析対象】

盾形埴輪 1 点、円筒埴輪 1 点、埴輪 2 点。

【分析・測定内容】

ケイ光 X 線分析装置による顔料の成分分析。

【使用機器】

○エネルギー分散型ケイ光 X 線分析装置 (XRF) (セイコーインスツルメンツ (株) 製 SEA5230)

試料の微小領域に X 線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有のケイ光 X 線を検出することにより元素を同定する。

測定は大気圧下でを行い、 ϕ 0.1mm のコリメータを用いて 50kV の管電圧でそれぞれ 180 秒間測定した。なお、X 線管球はモリブデン (Mo) である。

【結果と考察】

それぞれの埴輪について A 赤色部 (顔料付着部) と B 付着物のない部分について成分分析し検出元素とその強度を比較した。

①盾形埴輪（※出土遺物 17）

この埴輪は今回測定した 4 つの埴輪のうちで最も A・B 間の鉄 (Fe) の強度差が小さかつた。しかしながら、赤色を呈する顔料が朱 (HgS)・ベンガラ (Fe_2O_3)・鉛丹 (Pb_3O_4) であるとの仮定で考えると、水銀 (Hg)・鉛 (Pb) が検出されず、小さいながらも鉄の検出強度に差があることから、ベンガラが赤色を呈しているものと考える。

②円筒埴輪

強度差が約 3 倍あることから赤色顔料はベンガラであると考える。

③埴輪

②と同様、強度差が約 3 倍あることから赤色顔料はベンガラであると考える。

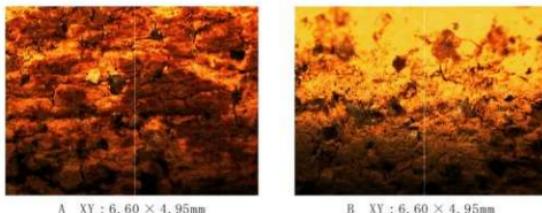
④埴輪

②、③と同様、強度差が約 3 倍あることから赤色顔料はベンガラであると考える。

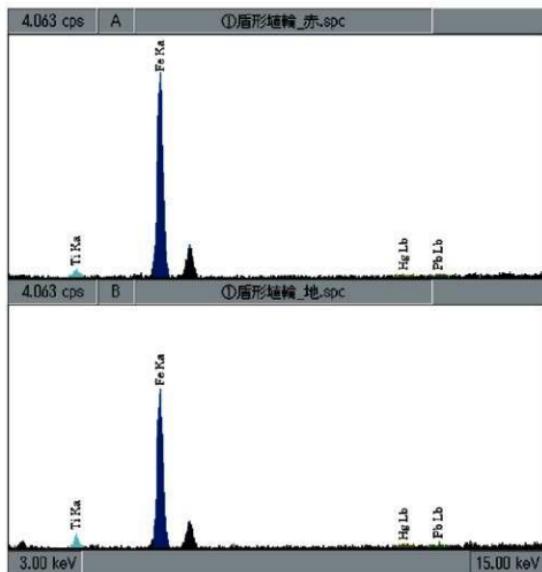
【分析・測定データ】

①盾形埴輪

■測定箇所



■スペクトル

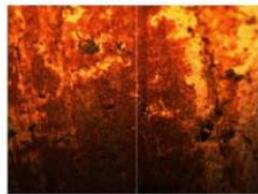


■データ

Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	B(cps)	R O I (keV)
22	Ti	チタン	K α	1.331	1.781	4.35- 4.66
26	Fe	鉄	K α	27.750	22.100	6.23- 6.57
80	Hg	水銀	L β	0.799	1.108	11.65-12.06
82	Pb	鉛	L β	0.937	1.159	12.42-12.84

②円筒埴輪

■測定箇所

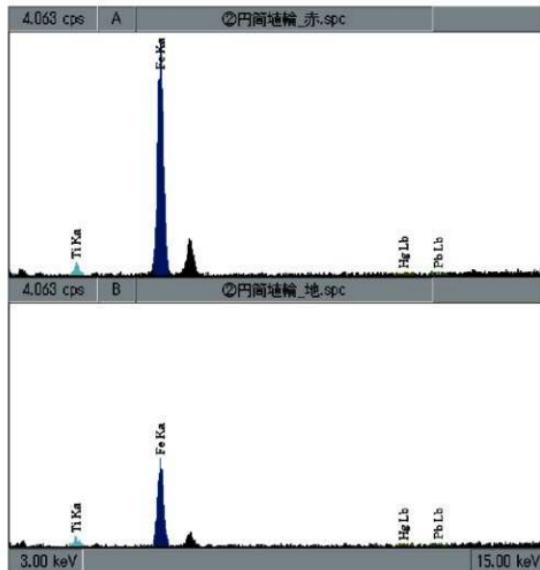


A XY : 6.60 × 4.95mm



B XY : 6.60 × 4.95mm

■スペクトル

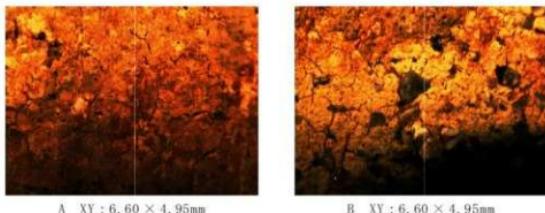


■データ

Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	B(cps)	R O I (keV)
22	Ti	チタン	K α	1.664	1.416	4.35·4.66
26	Fe	鉄	K α	31.527	11.636	6.23·6.57
80	Hg	水銀	L β	0.767	0.705	11.65·12.06
82	Pb	鉛	L β	0.972	0.792	12.42·12.84

③埴輪

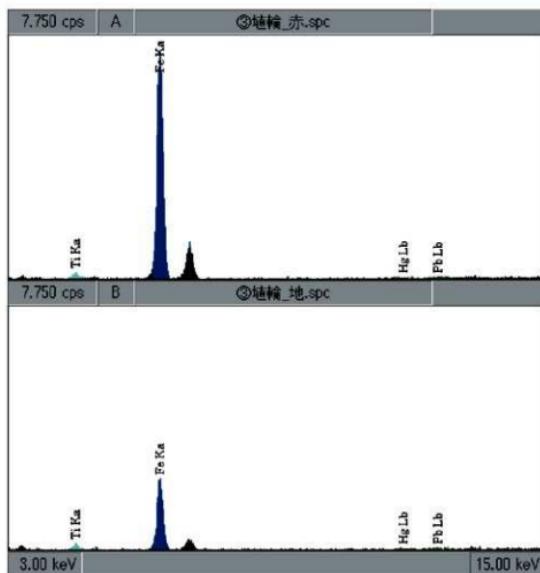
■測定箇所



A XY : 6.60 × 4.95mm

B XY : 6.60 × 4.95mm

■スペクトル

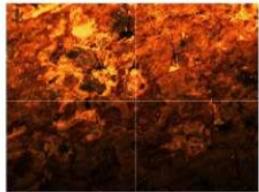


■データ

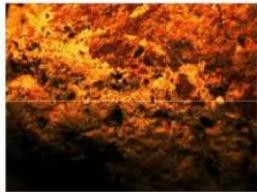
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	B(cps)	R O I (keV)
22	Ti	チタン	K α	1.673	1.529	4.35- 4.66
26	Fe	鉄	K α	61.338	19.028	6.23- 6.57
80	Hg	水銀	L β	0.736	0.695	11.65-12.06
82	Pb	鉛	L β	0.858	0.924	12.42-12.84

③埴輪

■測定箇所

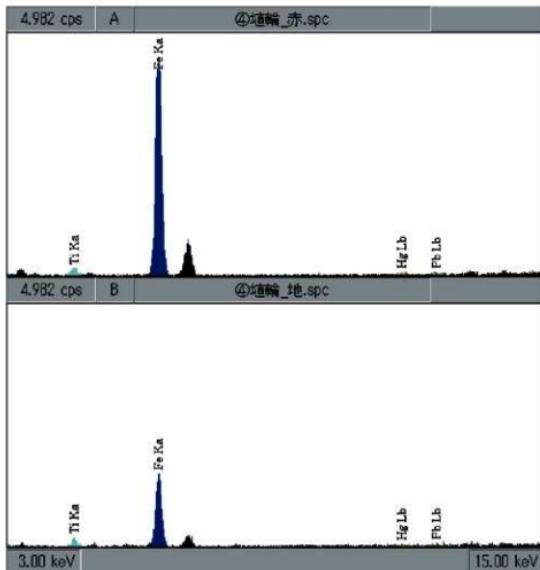


A XY : 6, 60 × 4.95mm



B XY : 6, 60 × 4.95mm

■スペクトル



■データ

Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	B(cps)	R O I (keV)
22	Ti	チタン	K α	1.510	1.442	4.35·4.66
26	Fe	鉄	K α	38.749	12.231	6.23·6.57
80	Hg	水銀	L β	0.854	0.739	11.65·12.06
82	Pb	鉛	L β	0.981	0.859	12.42·12.84

5. 地中レーダー探査

試掘調査に先行して、地中レーダー探査を行った。以下に概要を記す。



図 23 高塚山古墳調査測線図

調査結果報告書

共通報告色系列の識別について

- 茶色系は、自然地盤・人工構造地盤などで旧地盤地形状況を示す。
- 水色系は旧地形で低地や窪地の跡。溝、濠、旧河川、沢などの存在を示す。
- 青色系の線と円は深く埋め土された場所や局部的に深い部分を示している。
- 緑色系で示す部分は有機土地盤を示し、通常遺構土層をしめす。
- 赤色系は特徴有る地盤を含め、礫層や空洞などその他の状況を示し、その度報告する。

主な記号 ▼▽溝など → 地層傾斜 ↓注目点 ○◎●地点遺構、調査データの分析概要

1. 分析概要

①全体の分析状況

データは図24分析図に示すように6段階に、分けることが出来る。

A 主体部と考察される部分である。はっきりとした主体部の構造や範囲などは認められないが、赤い点ではなんらかの形状物の存在が推測される。また丘陵の一部には同系の色で示す、地点物の存在がある。

B 丘陵部は大きな積層区分として。少なくとも二段の積層境が見られる。Bは上部を構成する。

C Bの下部を構成する土層積層で版築などの構造面を有し帯状テラスラインの存在も考察される。BCの地盤構成は、南西側ではっきりしない。

D 周溝は2つのルートが考察される。Dルートは内側周溝ラインである。

E 外周溝の存在が推測される。図2緑点は周溝の推測ラインである。青点は外周溝の推測ラインである。

図25の地点番号に示す部分で、データを抜粋し次頁以降展示する。

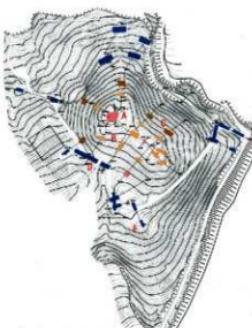


図24

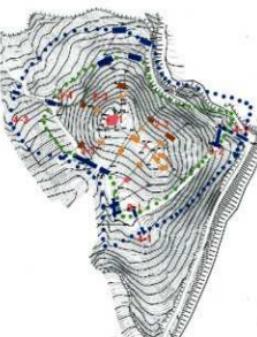


図25

2. 分析データの内容

主体部 図26

主体部の存在が推測される範囲でのデータである。土質の関係から遺構土の分離ははっきりととは認められないが円内のパターンに対し上部は一定の範囲で乱れている。同質系の土質構造で堅穴式墓室の可能性が推測される。主体部土質の構造識別は難解のこととも考えられる。

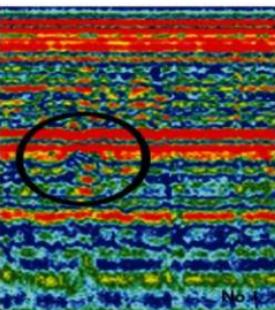


図26

前方部と後円部との接合面 図27

前方後円墳では構造上円墳部と方墳部の境が興味がもたれる。おおよそ積み上げる場合、どちらかの構造が先になるはずで、またその部分の土質構造も異なる。さらに接合部は雨水などの浸透部分になるため強固に作成される各種の条件が相まってデータには独特の表現が表される。通常は方墳部が先に建造されていると見られるが、特に発掘確認されていないのでデータからの推測である。図26データはくびれ部分見られる構造体である。左側が円墳部、右側が方墳部である。方墳部構造が右側に落ち込んでいる。

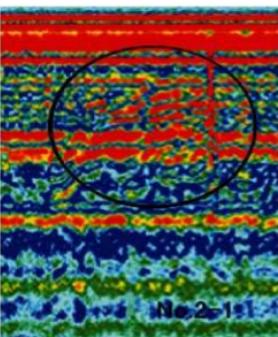


図27

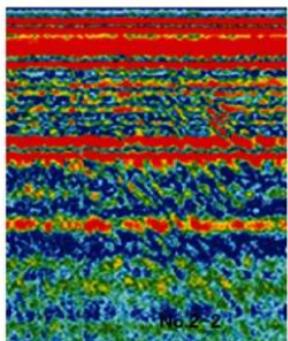


図 28

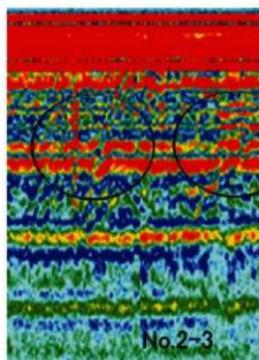


図 29

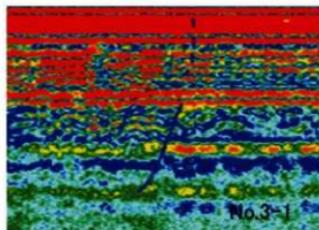


図 30

古墳斜面のデータ 図 28

人工的に版築積層された古代の古墳では積層面が正確に残存している。古墳の地中探査レーダー調査では、このデータを求めて古墳として正式に認識する。遺跡の構造物では、時代が新しいほどこのデータを求めるることは出来ない。戦国時代の土塁や、河川堤防、また富士塚等も掻き揚げ踏みつけであり、古墳時代の版築構造とはおよそ適合しない。古墳が長い年月でも崩壊せず残存するのはこの版築技術のためである。図 27 のデータに有る斜めの图形は水平段を構成するために積み上げられた人口積層である。この古墳のように自然の丘陵を利用しても必ず人工造成面は必要となる。東側急斜面を版築構造によって造成したことを示している。

図 29

円墳部北側の傾斜面データである。

図 30

南西角の堀の状況を取り出すデータである。

図 31

くびれ部分西側の状況を示すデータである。

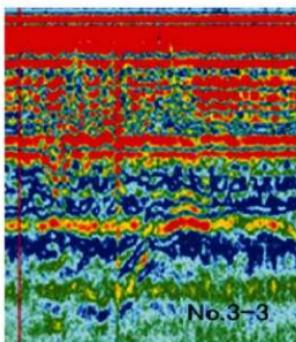


図 31

図 32

北西角の状況を示す。右側円内データから外周溝の存在を推測する。

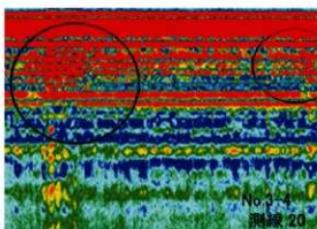


図 32

図 33

南西角で外周溝を考察させたデータである。No. 4-1 データ

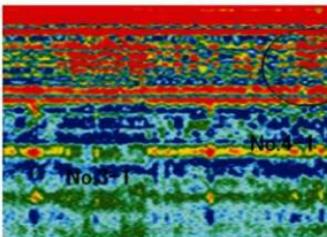


図 33

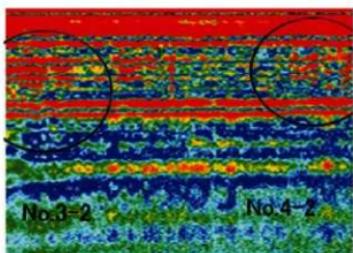


図 34

図 34

東南角斜面を行ったもので、図 34 と類似するデータが求められた。No. 4-2 データ

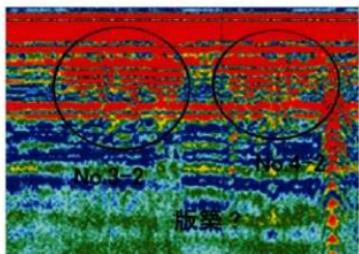


図 35

図 35

東南角の通路を行い 2 本の溝状データとその間の地盤構造が求められた。

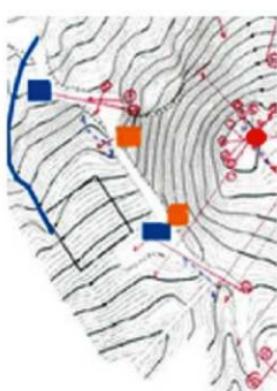


図 36

図 36

南西角方向のくぼみは外周溝の跡と考察される。水色実線部分

第4章 考察

1. 高塚山古墳出土埴輪の位置付け

円筒埴輪の特徴

高塚山古墳の円筒埴輪は、ほとんどがくびれ部付近のBトレーナーから出土している。残念ながら原位置を保った資料は確認されていない。しかしながら、完形品こそ出土していないものの、器面調整もよく残り、非常に丁寧に成形されており遺存状況の良い資料である。

円筒埴輪については鰐付の個体は確認できていないが、円筒部最上段の突帯と口縁部との間隔が狭い。朝顔形埴輪も同様に円筒部の最上段の突帯間隔がなくなる突帯近接が確認できる。円筒埴輪の突帯間隔は殆ど17cmに統一されており、非常に一定の規格に則って製作された状況が窺える。また、規格に関しては美濃の星飯大塚古墳の円筒埴輪（星飯報告126・127・159）と類似するものが確認でき、宝塚1号墳や石山古墳の規格とは異なる規格をもつ。

器財埴輪の特徴

器財埴輪は盾と蓋を確認し、盾形埴輪は、鉛歯文と綾杉文の組み合わせである。

なかでも盾形埴輪は良好な資料が得られた。盾形埴輪については多くの先学による多くの研究があるが、基本的には高橋克壽氏による盾面の分割方法による分類が基礎となっている。高橋氏は盾面が目字形ないしはそれに準ずる形に分割されているものと、II字形の区画によって分割されているものとに大別し、前者を木製盾の模倣、後者を革製の盾を模倣したものと指摘した。近年は、これ以外に、幅の狭い縁部と内区の間に外区をもつタイプが存在することが指摘されている。

高塚山古墳例の場合、盾面の分割は回字形とII字形に区画されるものに大別される。回字形のものは目字形内区が無文で、盾面の輪郭に沿って無文の外枠を回す点で、佐紀陵山古墳で確認されている宮内庁所蔵資料の忍ヶ丘系の文様と横方向の突帯を除いたものと考えられ、盾面の区画のみで捉えれば木製盾がモデルと考えられる。しかしながら、内区には平行線文は表現されておらず、内区と外区などに段差表現もない。一方で、縁部には綾杉文が描かれ、革盾の要素もみられることから、両者の折衷型とみるべきであろうか。近年確認された宝塚1号墳の盾形埴輪についても佐紀陵山古墳出土の宮内庁所蔵資料をモデルにしていた可能性が指摘されており、回の字タイプの盾形埴輪については今後、モデルとなった盾の系譜とともに今後検討の必要があろう。

II字形に相当するとみられるものについても綾杉文は表現されず、異なる方向の鉛歯文の組み合わせで表現されており、革盾を表現したものと考えられる。

蓋形埴輪の全形は不明であるが、笠部の線刻表現がなく、突起状の表現が施されるなど独特の表現がみられる。このような突起状の表現をもつ蓋形埴輪は、現状では伊賀の御墓山古墳の採集品に確認できるのみである。しかし、笠部の表現については段差表現一線刻表現という変化をたどることがいわれており、高塚山古墳の場合、破片数が少ないため詳細は不明であるが、段差表現が残っていることを重視すれば古い要素を残していると捉えることができよう。

埴輪の製作状況

近年の埴輪研究は、古墳における埴輪群の構成と製作集団の編成といった生産体制の研究が進んでいる。今回は、比較的多くの埴輪が出土したものの、時間的制約のため詳細な分析を行うことができなかった。従ってここでは、現状で確認出来る事項を基に埴輪の製作状況について気付いた点について若干触れておくこととする。

高塚山古墳の埴輪については大半がくびれ部付近のBトレンチからの出土であるため、樹立された埴輪の一部に過ぎない。しかしながら、出土した埴輪はいずれも成形・調整とも非常に丁寧に製作されており、突帯間隔の統一など規格性の強い資料である。色調・調整からみると、黄色で突帯の幅が狭くシャープなもの（13～16）・やや白っぽい淡黄色を呈し突帯を強くナデる一群（21・25など）淡黄色で突帯が分厚くM字形を呈し、赤彩がよく残るもの（24の円筒部など）などが特徴的なグループとして挙げられる。特に製作工人の編成を考えるうえで注目されるのは朝顔形埴輪（16）である。円筒埴輪と比較すると、器壁は1.0cmと薄く、突帯も幅が狭く突出度も高く、シャープなつくりである。また、口縁部（13・14）についても大型で重厚なものであるにも関わらず、1次口縁と2次口縁の接合の際、1次口縁端部にそのまま2次口縁を器用に積み上げており、埴輪の製作を熟知した人が從事しているものと考えられる。この製作工人は円筒・朝顔形の突帯間隔などにみられる特徴からも畿内の埴輪づくりの技術をもった集団と推定され、この集団の主導により生産が行われたと想定できよう。しかし、ここでは特徴的なものを挙げたに過ぎず、実際は他にも複数のパターンに分類できるため今後、図示できなかった資料も含め詳細な分析が必要である。また、24の特殊な埴輪にみられるように在地色も認められることは注意され、畿内の工人が全面的に生産に関与したという訳ではなく、臨時に召集された在来の工人集団との組み合わせによる生産体制であったことが推定されよう。

埴輪の系譜

高塚山古墳の埴輪の注目すべき点としては最上段突帯と口縁部の間隔が狭い円筒埴輪と、突帯近接タイプの朝顔形埴輪が製作されている点である。この特徴をもつ埴輪に関しては高橋克壽氏の指摘した「齊一性のある鱗付円筒埴輪」にみられる特徴であり、高塚山の資料は突帯間隔や形態・方形刺突の使用などこれらの埴輪と非常に類似する点が多く、中には殆ど同様の規格で製作されたと考えられるものもある。また、盾形埴輪については佐紀陵山古墳出土の盾の系譜をひく可能性があるものがある。以上のことから、高塚山古墳の埴輪は鱗付円筒埴輪こそ確認されていないものの、諸要素の類似から、高橋氏のいう「齊一的な埴輪」の系譜であると捉えられる。

前期の後葉段階から中期前葉において器財埴輪は地方では限定された分布に留まる。伊賀では石山古墳、北勢では能褒野王塚古墳・名越古墳、南勢で宝塚1号墳、美濃では昼飯大塚古墳で確認されているに過ぎない。北勢の能褒野王塚古墳では突帯近接の朝顔形埴輪が出土しており注目されてきた。また近接する名越古墳では採集資料ではあるものの鱗付円筒埴輪・鶲形埴輪が出土していて、突帯の設定技法の方形刺突痕も確認され、能褒野と同様の時期と考えられ

ている。高橋氏は「斉一的な埴輪」が伊賀から亀山を抜けて西濃地域に至る伝播経路を想定されたが、星飯大塚古墳では蓋形埴輪が大和北部の山陵町遺跡と類似した資料がS字甕と共に伴していることが中井正幸氏によって指摘されており、今回出土した高塚山古墳の埴輪には星飯大塚古墳と同様の規格の埴輪が出土していることが判明し、高塚山古墳は地理的に能褒野王塚古墳と星飯大塚古墳の中間地点に位置することを考えれば、高橋氏が指摘したこのルートの存在とその重要度を裏付ける貴重な事例を提示することになった。

そして、伊勢から三河へ抜けるルート上で確認されている埴輪と北勢で確認された埴輪と比較すると二重口縁壺の採用や鰐付円筒埴輪の未確認、器財埴輪の表現などの点で北勢の古墳出土のものと全く系統が異なることがわかる。このことは非常に注目できる事項であり、当時の伊勢地方の勢力と大和の諸勢力との政治関係の有無・地域間の繋がりの差と捉えられよう。

年代的位置付け

高塚山古墳の埴輪については、川西安宏幸氏によって氏の編年のIII期に比定されている。

また、採集資料を検討した桑原将人氏は外縁の2次調整はA種ヨコハゲのみで、B種ヨコハ

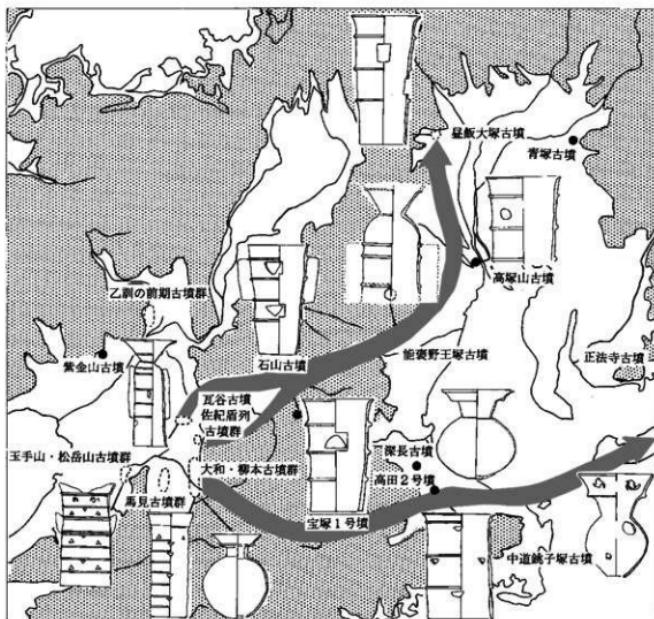


図37 4～5世紀前半における埴輪の東方への波及（高橋 1996- 図295 を改変して作成）

ヶが存在しないことを挙げ、能褒野王塚古墳よりは少し下るⅡ期とⅢ期の間と比定している。今回の調査で出土した円筒埴輪には鱗付のものではなく、円形透かしのみしか確認されていないことから一見するとやや新しくみえるが、基底部高や突帯間隔は美濃の星飯大塚古墳や畿内の前期後葉段階に相当する古墳出土のものと同様の規格で製作されており、桑原氏の指摘の通りB種ヨコハケがみられない点、盾形埴輪に回字形の区画の存在、蓋形埴輪の段差表現の残存から、川西氏による編年のⅡ期の新相に相当しよう。これは出土した土師器の年代観とも矛盾しない。

2. 高塚山古墳の墳形・規模・時期

今回の部分的なトレンチ調査によって、古墳の墳形や規模などについて十分とはいえないまでも、ある程度の推測が可能となった。調査により明らかとなった点は次のとおりである。

- ①予想外に墳丘の盛土が自然流出、あるいは人為的な移動による二次堆積で改変を受けていたが、古墳の基底部と思われる部分を後円部と前方部の境のくびれ部近くや、前方部南側侧面、前方部前面で確認することができた。
- ②後円部の基底については、Bトレンチで確認できたものの、後円部径の確定を目指したH・Jトレンチからは明らかにすることはできなかつた。
- ③くびれ部に近いトレンチを中心に、多量の円筒埴輪や盾形埴輪などの形象埴輪、及び土師器の破片が出土した。
- ④葺石の存在を確かめることはできなかつた。崩落した石材ととれるようなものもなく、少なくとも尾根頂部側の緩斜面には葺石は葺かれていなかつた可能性の方が大きい。あつたとしても部分的なものと考えられる。しかしながら、今回トレンチを設けなかつた北側の谷に向かう比較的急斜面側は、低地部を望む方向にあることから、葺石の存在は積極的に否定できない。

以上から高塚山古墳の墳形や規模等で推定できることとして、墳形は前方部側面基底部及び後円部くびれ部付近の基底部を確認できたことから、測量図で判読できるように、前方後円墳となることである。またその墳丘長は、後円部の中心が必ずしも確定できないが、Bトレンチでその基底ラインが推定されたのに対し、HトレンチとJトレンチでまったく古墳に関わる地形変化はみられなかつた。しかしながら、別途作製した鳥瞰図からすると標高81mラインをおおむね最低として裾線を推定できることから、後円部の径はおおよそ32mを超えるものではないことがわかる。

さらに、前方部側面の基底は、Aトレンチで確認でき、前方部前面についてはDトレンチで確認できる。これによると、前方部の盛土の状況から判断して墳丘長は56m程度となる。

以上の結果を踏まえても、調査結果から墳丘の全体像を判断するには十分とは言えないため、宮川氏らが提唱する前方後円墳の築造企画論（宮川律・石部正志・田中英夫・堀田啓一1979「畿内大形前方後円墳の築造企画について」『古代学研究』89 古代学研究会）を援用することで墳丘の推定を行いたい。これは、前方後円墳の後円部径を8等分し、その1マスの単位を「区」と呼び、これを前方部にあてはめて1～8区型に分類するもので、前方後円墳の築造にあたり、「区」を単位として、前方部の企画が決められたとされ、前方部が1～4区型となる

ものを帆立貝形古墳とし、5区型以上を通有の前方後円墳とするものである。

高塚山古墳の場合は、1区はほぼ4mの前方部6区型となる（復元A案）。ただし、前方部長は今回のDトレーニングの結果のみの判断であり、前方部の隅部の確認はできていないため、確定的な要素も含むことから、5区型の前方部となる可能性も完全には否定できない現状である（復元B案）。

伊勢地域には松阪市宝塚1号墳をはじめ、津市池の谷古墳、亀山市能褒野王塚古墳などの前期末～中期前半の主要な前方後円墳は、前方部5区型の企画となるものが多く、伊賀盆地や伊勢湾沿岸部広げてもその傾向がうかがえる。（穂積裕昌2004「5世紀の伊勢～首長墓の動態にみる伊勢諸地域の位相～」『平成14年度 第3回松阪はにわシンポジウム 東海の埴輪と宝塚古墳』松阪市・松阪市教育委員会）高塚山古墳が、前方部6区型となる点、周辺の前方後円墳の築造企画とは異なることになり、その是非を含めて、将来の課題としておきたい。

また宝塚1号墳の場合、前方部前面の敷石状遺構を含めて全長111mとされるが、これによると高塚山古墳の場合、宝塚1号墳の全長に対して、約1/2程度の規模とみることが可能である。

出土遺物は、Aトレーニングのくびれ部付近を中心に、普通・朝顔形の円筒埴輪、盾・蓋などの器財類の形象埴輪及び高杯・小型丸底土器などの土器がある。このうち円筒埴輪は、口縁部から基底部まで確認できるものはないが、2次調整にヨコハケを施し、円形に限られるスカシ孔や台形のタガ形状となるが、タガ接合に際して方形刺突を本体に加える点などは、川西宏幸氏の編年ではII期の特徴を残す。盾形埴輪についても、盾面の表現や盾面と円筒部の接合状態などから、円筒埴輪の時期と齟齬しない。（高橋克壽1988「器財埴輪の編年と古墳祭祀」『史林』第71卷第2号 史学研究会）

一方、土器の形態は、小型器台が残存するなどの特色があるが、おおむね松河戸I式の新しい段階に相当する一群であり、荒形の土器も近在では大垣市星飯大塚古墳や松阪市宝塚1号墳に類例を求めることができる。

したがって、埋葬施設や副葬品は未知ではあるが、高塚山古墳の築造時期は古墳時代中期初頭、「前方後円墳集成編年」の4期に相当するとみられ、宝塚1号墳よりむしろ星飯大塚古墳の築造年代により近いと判断できる。

3. 高塚山古墳をめぐる伊勢湾周辺の動向

高塚山古墳は、これまでの推定を大きく変えることなく、全長56m程の前方後円墳と考えられる。ただ、築造時期だけは判然としなかったが、今回の調査で中期初頭頃にほぼ特定できる。伊勢湾周辺では大垣市星飯大塚古墳と時期的に近い。円筒・形象埴輪が伴うことは判明したが、葺石や造り出しなどの付属施設の存在は明確にすることはできなかった。

高塚山古墳と前後する時期の前方後円墳は、伊勢地域では亀山市能褒野王塚古墳の他に、津市池の谷古墳や松阪市宝塚1号墳があり、これらはいずれも生産地あるいは居住域である低地部と伊勢湾や主要河川を望む丘陵または台地上の高台に立地する古墳で、それぞれの流域で最大級の前方後円墳でもある。この時期に地域ごとに大型の前方後円墳が築かれる点は、全国的な傾向とも符合する。

伊勢地域の場合、後続する中期中頃から後半の首長墳の墳形は、前方部の短い帆立貝式の前方後円墳ないしは造出しをもつ大型の円墳に変わることが知られている。また、それ以前の前期後半段階は、前方後方墳か大型円墳がみられた。つまり前方後円墳として累代の首長墳が維持されない地域である。

高塚山古墳を中心とした当地の首長墳系列をみていくと、古墳時代前期には員弁川を遡った、現在のいなべ市、旧北勢町の麻生田で全長 43 m の前方後方墳の麻績塚古墳がある。未調査のため、詳細は不明だが、伊勢湾周辺は古墳時代前期の前方後方墳が、前方後円墳に先行して造営されるケースが多く、麻績塚古墳と員弁川を挟んで対岸に位置する宮山遺跡では、前方後方形の周溝墓の可能性が高い墳墓が確認されている。

また、静岡県熱海市の MOA 美術館には、伝桑名町出土とされる 3 面の鏡が所蔵されており、桑名市内のどこかに前期古墳の存在をうかがわせる資料として注目されてきた。これらの鏡は三角縁神獸鏡で、獸文帶四神四獸鏡、獸文帶三神三獸鏡、獸文帶二神二獸鏡の各 1 面、前者には「君・臣・高・官」銘が、後二者には「天・王・日・月」銘があり、舶載鏡とされてきたものである。これらの鏡が出土した古墳の候補として高塚山古墳が挙げられたこともあるが、(近藤義郎編 1992『前方後円墳集成 中部編』) 今回の調査から導き出される築造時期からすると、その可能性は低い。

員弁川流域では、他に前・中期の首長墳を見出すのが難しいが、養老山系沿いにみれば、海津市(旧南濃町)円満寺山古墳が丘陵頂に立地する。古墳の規模は高塚山古墳に近いが、竪穴式石室から三角縁神獸鏡 2 面、画文帶神獸鏡 1 面などが出土しており、高塚山古墳よりは前段階に位置づけられる古墳である。

さらに遡れば、大垣市を中心とする西濃には前・中期の前方後円墳が集中する地域もある。とくに高塚山古墳と築造時期が近いと考えられる星飯大塚古墳は、墳丘長 150 m の前方後円墳で、滑石製模造品をはじめとする出土遺物や多様な円筒・形象の埴輪が確認されており、荒形土器や高杯を中心とする小型土師器などの古墳祭祀に伴う儀礼行為が高塚山古墳と共通する。

古墳時代当時の地形からすると、伊勢湾は木曾三川として沖積化が進む以前、養老山地沿いに現在の大垣市付近にまで広がっていたと考えられることから、高塚山古墳はまさしく岬状の位置にあり、伊勢湾をパノラマ的に見下ろすことができる。つまり、当時の海上交通を考えれば、濃尾地域と伊勢地域とを結ぶ最も要となる地点を掌握している場所にある。

高塚山古墳は、古墳時代前期末～中期初頭にかけて前方後円墳としては単発的に出現する伊勢地域の特色を表す古墳ではあるが、発掘調査で詳細が判明している南勢地域の宝塚 1 号墳とは埴輪の規格や手法上の特徴などは異なる点が多く、むしろ能褒野王塚古墳や星飯大塚古墳との親近性がより強い可能性が高い。

また、古墳の築造企画についても、あくまでも現段階での判断だが、伊勢地域をはじめ周辺でもあまり例のない 6 区型の前方後円墳となり、90～100 m 超の墳丘長をもつ伊勢地域の同時期墳の前方後円墳と比べ、墳丘の大きさは小振りとなるなどの違いがある。しかしながら、北勢地域で高塚山古墳の占める歴史的位置の重要性は、南勢地域の宝塚 1 号墳とまったく引けをとるものではなく、むしろその被葬者が濃尾地域と伊勢、そして大和とを結節させる役割を担ったことは、今回出土した埴輪の特色等からもうかがうことができる。

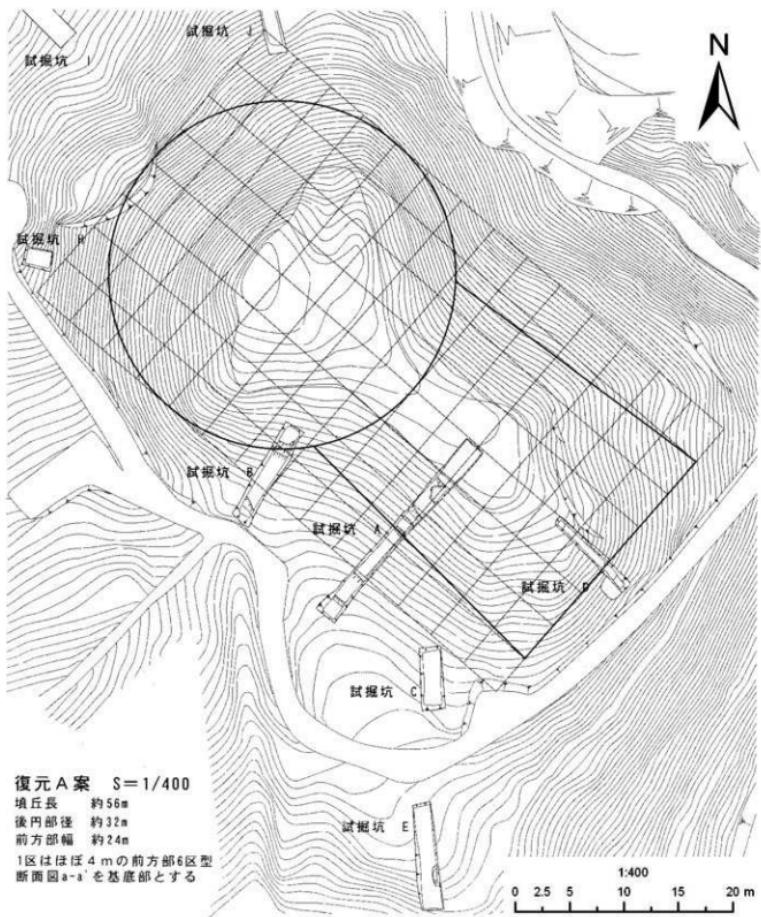


図38 復元A案平面図

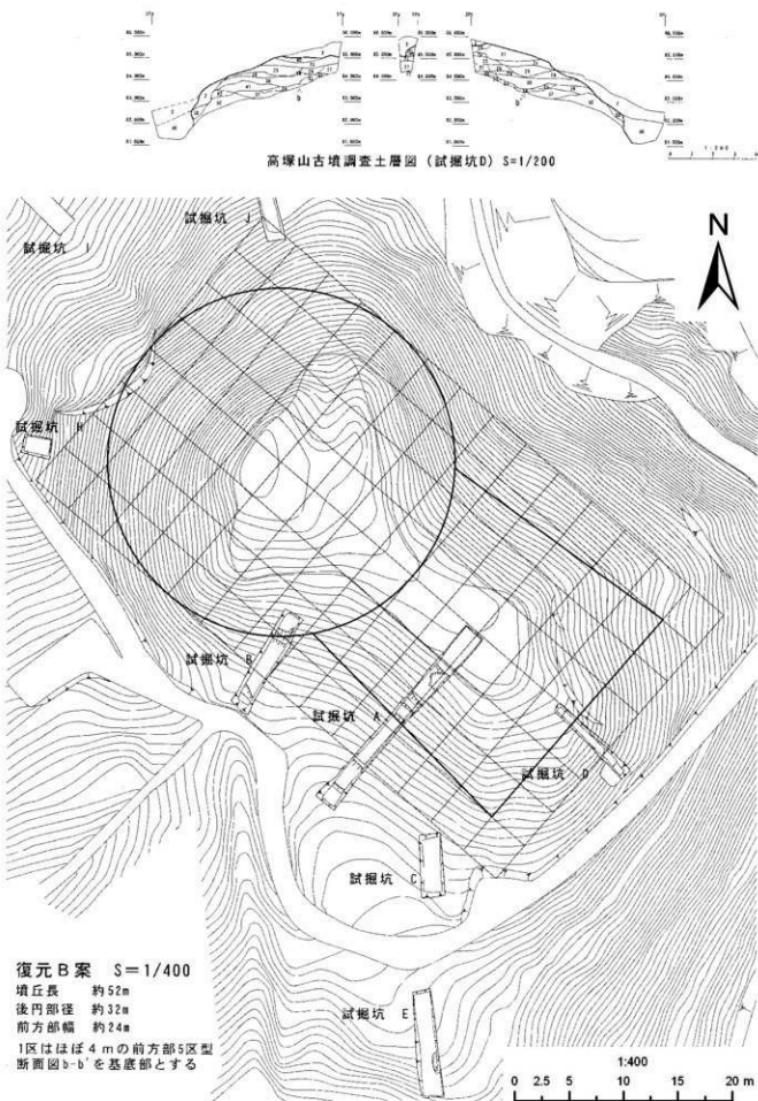


図39 復元B案平面図

第5章 高塚山古墳の保存と整備

1. 古墳の保存

(1) 課題

高塚山古墳では、降雨や倒木などによる表層の流土、安定勾配を超えた急斜面のすべり、所有者の生業維持のための人為的な削平等が見られる。古墳の周辺でも隣接する道路や住宅側の急勾配の崖面の防災対策、さらに景気回復に伴う開発行為の再開なども今後予想される古墳の保存にかかわる問題である。

古墳の範囲や遺跡の本質的価値を明確化し、遺跡を良好な状態で後世に伝えるための古墳本体保護措置、古墳が立地する地盤や地形の治山・防災対策による安定した基盤の保護措置の検討等が今後の課題となる。

北勢地域における高塚山古墳の占める歴史的位置の重要性を鑑みると古墳範囲の史跡指定による保護に加え、この時期の首長墓が低地部と伊勢湾や主要河川を望む高台に立地したことや江戸時代には景勝の地として地元の人々に親しまれてきたことから、周辺も含めた公園化等により貴重な遺跡環境を開発から守るための取り組みや施策も検討しなければならない。

(2) 保存管理計画の策定

遺跡の本質的価値と構成要素を明確化し、それらを適切に保存・管理していくための基本方針及び方法、現状変更等の取扱基準等の策定を目的として、保存管理計画を策定することが望ましい。本遺跡のように公有化がなされていない場合、遺跡等の保護と土地所有及び土地利用との調整を要することから、管理団体が、現状変更等の取扱基準及び公有化の方向性のみならず、整備等の将来構想をも含めた保存管理計画の策定を進めることが必要である。

2. 古墳の整備

(1) 整備計画の立案

遺跡の整備における基本方針や方向性は、発掘調査等の学術調査の成果に基づいて検討すべきものである。また、保存が決まった遺跡等の空間に対する多様な社会的要請を踏まえ、それらと遺跡の望ましい保存・活用の在り方についての調整も必要であることから、整備事業を適切かつ円滑に進めるために、整備実施に先立ち、基本方針及び手法、財源、実現への道筋等を的確に示した整備計画の策定を行う。

(2) 事業企画

遺跡の整備・活用事業を開始するためには、事業主体となる管理団体が当該事業の企画を行うことが必要である。事業の企画は地域住民からの強い要望を受けて行われる場合、遺跡が毀損又は喪失し、緊急に事業を開始する必要がある場合、あるいは公團行政又は観光行政からの多様な要請をも踏まえて行われる場合等さまざまである。いずれの場合においても、当該事業を開始させるためには、事業主体が事業の着手に関する意志決定を行うことが必要である。

(3) 高塚山古墳の整備

遺跡の整備は、規模や重要性、立地により様々な整備が行われている。大規模な国指定の遺跡においては、全域をゾーニングして、エリア毎にテーマを決めて整備を進め、観光と連携してアクセス道路の整備や物販施設の建設を行い観光の拠点として活用している事例もある。

単体の遺跡の場合では、遺跡の範囲のみを整備することが多いが、整備手法も復元、遺構養生、露出展示など多種多様であり、基本的に現存する遺構を保存することが前提となる。

高塚山古墳の場合も、展示や公開、公園整備等の活用面は基本計画を作成し、これに沿って整備を進めるが、既に円弧すべりや表層の流土、斜面崩壊が生じている部分については緊急保護対策の必要性を検討し優先して実施する。

緊急保護対策の必要性は、ボーリング調査による基礎地盤の構成や地下水位等の把握、土質試験による強度の確認と、今回実施した地形測量から起こした断面を基にして豪雨時や地震時等を想定した安定解析等の工学的調査により判断し、緊急性が高い場合には、排水や法面保護工等の必要とされる措置の具体化を図る。

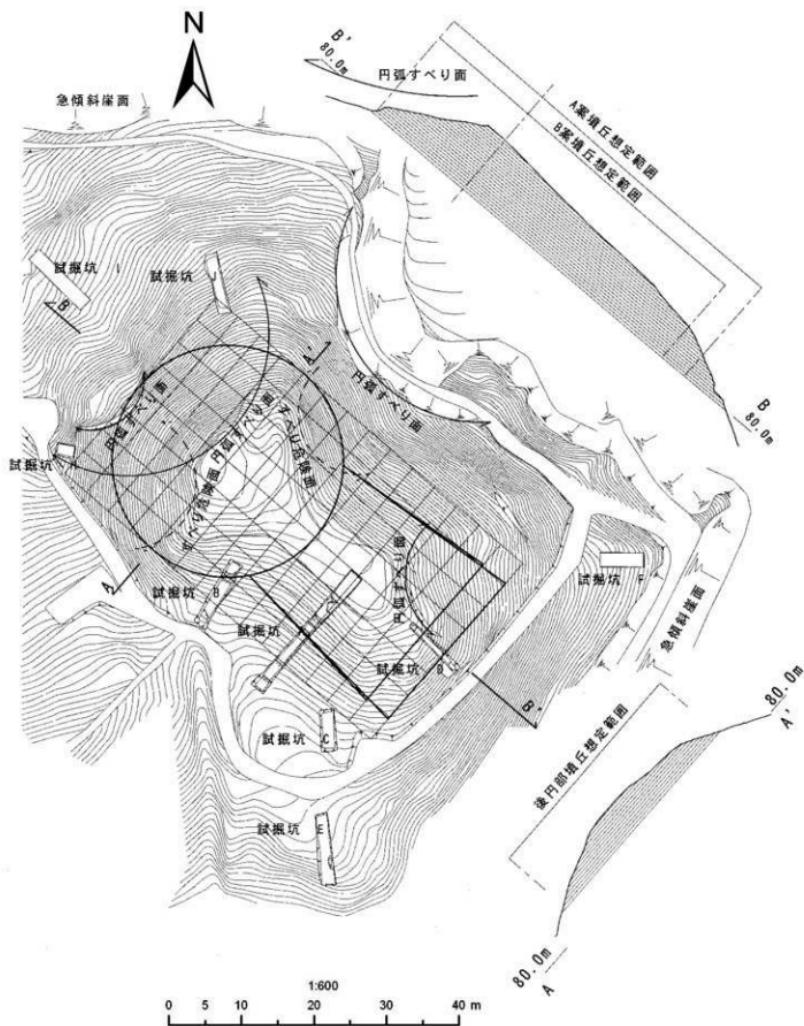


図 40 古墳範囲における地盤の崩落・変形箇所

参考文献

参考文献

- 赤塚次郎 「付論 松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1994年
- 一瀬和夫 「古市古墳群における大型古墳埴輪集成」『大水川改修に伴う発掘調査概要・V』大阪府教育委員会 1988年
- 一步庵主人 『桑名旧記』 1796年
- 亀山隆 「亀山地域における古墳文化初元期の埴輪について～能褒野古墳・名越古墳の資料紹介～」『亀山市歴史博物館年報第2号』 亀山市歴史博物館 1996年
- 川西安幸 「円筒埴輪總論」『考古学雑誌』第64卷第2号 1978年
- 宮内庁書陵部 『出土展示目録』埴輪4 2003年
- 桑原将人・大内忠 『桑名市高塚山古墳集の円筒埴輪・桑名高校所蔵考古資料調査報告ー』『三河考古』第10号 1997年
- 久波奈古典籍刊行会 『久波奈名所図会』(中巻) 1977年
- 桑名市教育委員会 『桑名藩領分郷村案内帳附案内帳』『桑名藩資料集成』 1990年
- 近藤義郎 『金藏山古墳』 倉敷考古館研究報告第1冊 倉敷考古館 1959年
- 近藤義郎編 『前方後円墳集成 中部編』 1992年
- 櫻井久之 『長原40号墳の形象埴輪』『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告IV』財団法人大阪府文化財協会 1991年
- 高橋克壽 『器財埴輪の編年と古墳祭祀』『史林』第71卷第2号 史学研究会 1988年
- 高橋克壽 『埴輪生産の展開』『考古学研究』第41卷第2号 1994年
- 高橋克壽 『埴輪の成立と展開』『季刊考古学・別冊14 紀内の巨大古墳とその時代』雄山閣 2004年
- 高橋克壽 『歴史発掘⑩ 墓輪の世紀』講談社 1996年
- 高橋工 『盾形埴輪の検討』『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告IV』 財団法人大阪府文化財協会 1991年
- 筒井正明編 『石山古墳』 第24回三重県埋蔵文化財展展示図録 三重県埋蔵文化財センター 斎宮歴史博物館 京都大学文学部博物館 2005年
- 中井正幸 『美濃における大型古墳と埴輪』『東海の埴輪と宝塚古墳』第3回松阪埴輪シンポジウム 松阪市教育委員会 2003年
- 東方仁史 『器財埴輪からみた昼飯大塚古墳—蓋形埴輪と盾形埴輪を中心として—』『史跡 昼飯大塚古墳』 大垣市埋蔵文化財調査報告書 第12集 大垣市教育委員会 2003年
- 福田哲也・松葉和也 『史跡 宝塚古墳群』 松阪市埋蔵文化財調査報告1 松阪市教育委員会 2005年
- 古谷毅 『埴輪工人の移動からみた古墳時代前半期における技術交流の政治史的研究』東京国立博物館 2003年
- 不破直幹・不破正人 『御領分郷村案内帳附案内帳』 桑名宗社(春日神社)社務所 1984年
- 堀田吉雄 『桑名の民俗』 桑名市教育委員会 1987年
- 徳積裕昌 「5世紀の伊勢～首長墓の動態にみる伊勢諸地域の位相～」『平成14年度 第3回松阪はにわシンポジウム 東海の埴輪と宝塚古墳』 松阪市・松阪市教育委員会 2004年
- 三重県立桑名高等学校郷土研究クラブ 『久波奈』第13号 1972年
- 宮内黙藏 『伊勢名勝志』 1889年 (三重県郷土資料叢書第67集『伊勢名勝志』(復刊)1974年)
- 宮川穆・石部正志・田中英夫・堀田啓一 「畿内大形前方後円墳の築造企画について」『古代学研究』89 古代学研究会 1979年

三重県桑名市

高塙山古墳基礎調査報告書

発行日 平成 18 年 3 月 31 日

発 行 桑名市教育委員会

〒511-8601 三重県桑名市中央町 2 丁目 37 番地

編 集 (株) 文化財保存計画協会

〒150-0021 東京都渋谷区恵比寿西 1 丁目 9-6

印 刷 瞬報社写真印刷株式会社

〒206-0001 東京都多摩市和田 426-1
